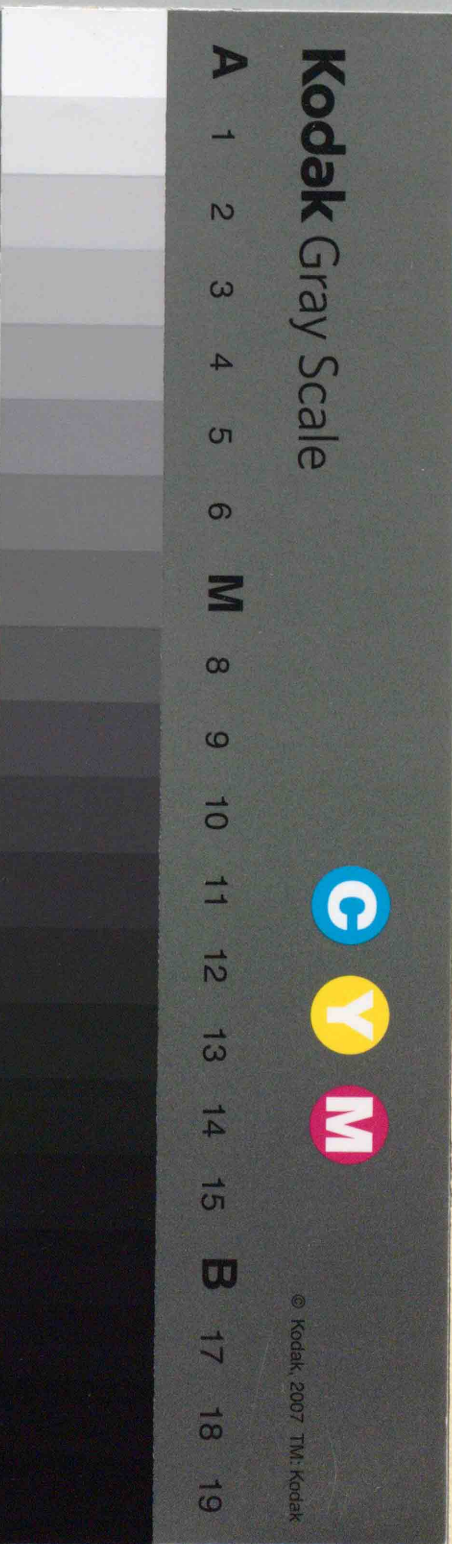
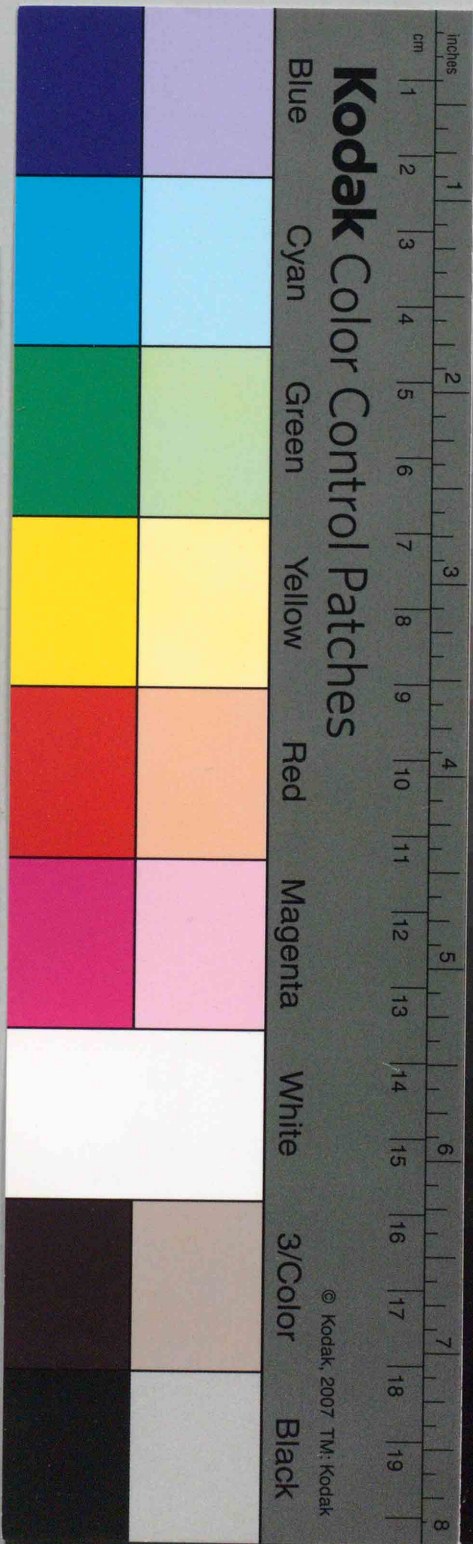


新撰實業讀本 卷七

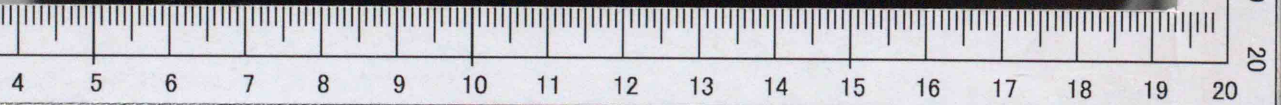
教科書文庫
4
810
40-1917
2000081510



43345

教科書文庫

4
810
40-1917
20000
81510



教科書文庫
4
810
40-1917
2000081510

4C
810
本6

文學博士佐々政一編

改訂
新撰實業讀本

東京株式會社
明治書院

広島大学
教
81510
圖書

広島大学図書
2000081510

改訂
新撰實業讀本 卷七目次

- 一 綠蔭清話……………前田慧吉、活潑美談……………六
- 樂山窩記(漢文)……………
- 二 文學と人生上……………藤井健次郎、時代思潮……………七
- 三 文學と人生下……………藤井健次郎、時代思潮……………一二
- 四 文學と人生下……………藤井健次郎、時代思潮……………一七
- 五 志を述ぶ……………藤井健次郎、時代思潮……………二二
- 元入(漢文)……………
- 六 現代の文學……………三三

目次

七 園守

孝田森伴一山園 四三

記三浦氏草櫻(漢文)

四八

八 徒然草抄

吉田兼好一徒然草

五〇

一 折節のうつりかはり

五〇

二 猫また

五四

三 人の心すなほならねば

五五

四 花と月

五六

九 古今東西を包容せよ上

三宅雪村

五八

一〇 古今東西を包容せよ下

六三

君子有五樂(漢文)

六八

一一 草木を愛し自然を喜ぶ上

芳賀矢一曰民性論

六九

一二 草木を愛し自然を喜ぶ下

七七

葛餅歌(漢詩)

八五

一三 幻住庵の記

松尾芭蕉

八六

一四 學生の意氣

竹越三久一三又文海

九三

一五 自然に接せよ

高山樗牛

九六

偉人能發山水之美(漢文)

一〇〇

一六 近世の和歌

一〇一

一七 ソクラテース最後の教訓上

穂積原重

一〇八

一八 ソクラテース最後の教訓下

穂積原重

一一三

一九 憲法

穂積原重

一一八

英雄罵碩儒(漢文)

一二三

二〇 光頼卿の參内……………光頼卿……………一二三

卷七目次終

改訂新撰實業讀本卷七

一 綠蔭清話

近來は、一面から見ると、從來の如き風流な趣味は追追な
くなつて來るやうであるが、併し他の方面から云ふと、從來
よりも一層、書畫とか骨董とか手紙云ふが如きものが行はれる
やうにも見える。吾吾のやうな字の拙い者でも、到る處、揮毫
を頼まれる。しかしその頼み方が頗る無趣味、無風流で、十人
が九人までは、修養になるとか、教訓になるとか云ふものを

書いて呉れと云ふ、頗る直接的な、露骨な教訓・金言などを好む。一體、修養はさう直接に眞面目くさるやうな言葉ばかりで出来るものでは無いのに、一向そこに氣が付かないで、修養ならば修養、教訓ならば教訓と、直接的な、露骨な言葉で無くしてはならぬといふのが、風流趣味の廢つたところだと思ふ。

山が高いとか、水が清いとか、月がよいとか、花が美はしいとかいふことは、直接的な教訓ではないが、間接には是が修養になるのである。眞の風流の味を味ふことが、つまりは教訓にもなるのである。修養、教訓を得るには何うしても心を清めてかかるのが一番である。言換ふれば自身の心を天然に接觸さす事が必要である。それ故書にしても、必ずしも論語

や孝經（孝）などの語句のみが修養になるものではなく、又畫にしても、必ずしも孔子や楠公などの像の如きもののみが教訓になる譯でもない。山水の秀でた姿を謠ひ、花鳥の麗しい有様を描き出した所にも、やはり修養、教訓になる點は澤山ある。世間には、この間の消息を一向知らぬものが多い。

又書畫の如きも、値段の高い眞に珍しいものなら珍重するといふのが、かの骨董好の有様である。併し値段は無くとも、珍奇でなくとも、之に對すれば人世の事を忘れるといふ趣味があれば、そこに莫大な價值があり、修養、教訓の資にもなるのである。要するに今日の骨董好は表面的には風流であるらしく見えるけれども、其の實は全く趣味といふもの

がなくなつて仕舞つて居る。すべてが何事によらず現金的になつたのである。

古人の語で、風流にして且つ修養になるものの一二を擧げて見よう。

相地於鏡湖危峯之間、好花一瓶、名香一爐、一箇蒲團、一箇鉢、

孟佛號數千聲、華嚴一兩卷、不亦好乎。

中堂讀倦、遊後園歸、絲桐三弄、心地悠然、風靜月明、天壤之間、

不知復有何樂也。

香清茶熟、有客到門、可喜。鳥啼花落、無人亦自悠然。

斯ういふことは、一寸見ると唐人の寢言のやうであるが、今日世の中の事に齷齪として、朝から晩まで勞役する人間は、

殊に斯ういふ事を時時口に唱へて、よく其の意味を味ふことが修養上必要であらうと思ふ。

全體支那畫や日本畫には、山水であるとか、草木であるとか云ふ種類が多い。これは或必要から起つたものであると思ふ。高い山を見ることも出來ず、清い川の流を見ることも出來ない都人士は、山水の美を詠じた詩歌を楣間に懸けて眺めるがよい。自ら煙嵐の境に立つ想があらう。家と家とが相接してゐて、草や木を植ゑたくとも、地面のない處では、蘭菊松竹の畫を床の間に掛けて眺めるがよい。自らその清香に薰化せられる感があらう。

鹿爪らしい直接的な修養談のみが必ずしも効果のある

洪自誠著
陸紹衍著

ものでは無い。それよりも、暫くでも、仙人的の境遇に入るの
が却て効果がある。従つて科外の讀書も、哲學めいた難解の
ものでなく、和書ならば方丈記や徒然草の様なものが多い、
漢書ならば菜根譚、醉古堂劒掃などがよろしい。之に依つて
心を自然に暝合（白化下味は蓋を破る）することが出来るならば、身は紅塵の裏に
ありと雖も、自ら天地の靈體に接して、自ら修養をなすこと
が出来らうと思ふ。（前田慧雲「活修養」に據る）

樂山窩記

樂水子、以樂山扁其窩。或嘲之曰、子庭無一綫之水、一拳之山。其
足亦未嘗渡六合而西也。則何山水之所觀且樂也。樂水子不能

武藏國多摩川の
下流を六郷川といふ
は六合川といふ

答、寢而思之。若有語者曰、子家車轂擊於前、而馬跡交於後。而入
其室、彈其琴、則有高山流水之音。讀其詩、則有雲峯烟波之思。叩
其心、則巍然如山、淡然如水。其過雖未嘗渡六合、然其心已餐蓮
嶽之秀、而吸琶湖之清矣。則所謂山水者在室、而不在庭、在心、而
不在物。其爲樂、有可以獨會、而不可以共語者。子何必答之、之爲
言終而覺、乃試把枕上之琴、與詩而對之。曾襟如刷、恍然聞水音
之潺湲於耳底、而看山光之蒼茫於眸中。（鹽谷岩陰）

二 文學と人生上

諸君、文學は何であるか。文學は人生の縮圖である。海のや
うに広い人生と云ふ中に現れた所の百般の姿相を、盥の如

き狭い表面の上へ宛然に描寫したのが文學である。

さらば人生とは何であるか。よく世間では、吉凶禍福は糾へる繩の如し。とやら言ふが、人生の運命は管に糾へる繩の如きのみではない。彼の大空に横はれる雲のやうに、あるかと思れば消え、消えたかと思れば涌き、峯かと思れば巒かと思れば虎、乍にして淡く、乍にして濃く、變幻出沒殆ど端倪すべからざるやうである。ただ此の一片の雲でさへ少なからず吾等の感興を惹くものを、それよりも更に奇妙で、更に變化ある此の人生の波瀾動搖が、どうして吾等の感興を惹起さずに止まらう。變幻出沒極まりないのが人生の姿相である。これが人生であるかと思れば忽ち其の姿をかへ、それが

眞相かと思れば又忽ち消えて跡を晦ます。凡手は容易にこれを捉へることが出来ず、凡眼はなかなか其の眞相を認めることが出来ない。しかも捉へることがむづかしければむづかしいほど、認めにくければ認めにくいほど、之を捉へたい、認めたいと思ふは、誰しもの人情である。然るに詩人なる人は、其の靈妙な腕と其の鋭敏な眼とを以て、人生の眞相を捉へて來て、それを世人の前に示すのである。是が文學である。そこで世人は堪らない。自分の熱望の目的物が眼前に現れるから、人の視線は之に吸ひつけられ、觀ても觀ても、觀飽く事を知らないのである。

私は文學は人生の縮圖であると云ふ。その大體の意味は

*稿本氏。

前に言つた通であるが、猶爰に一つの疑が残つて居る。それは外でもない。その縮圖とはどういふ意味であるかと云ふことである。雅邦の描いた瀟湘の八景は彼の揚子江邊の大觀イセツンの縮圖である。又其の邊で賣つて居る寫眞もやはり同じ大觀の縮圖である。寧ろ寫眞の方は實際の通、一木一石少しも實際のものと違はず寫されて居るが、雅邦の描いたものはさうでない。精密に見れば實際に生えて居ない木が生えて居たり、實際にある巖が省かれて居たりするであらう。しかしながら兩者共に彼の美はしい壯觀の縮圖たるに於ては同一である。文學は人生の縮圖であると云ふ。縮圖は彼の雅邦的縮圖の意か、寫眞的縮圖の意か、之が残つて居る所の

問題である。

此の問題は一刀兩斷に答へる事が出来る。凡そ文學とあらむ程のものは必ず雅邦的の縮圖であり、又あるべきものたる事は疑ないと思ふ。成る程唯縮圖といふ點より見たならば、寫眞の方が遙かに精密な縮圖であらう。併し今少し他の點から考へれば、さうではないのである。凡そ物には要と云ふべき點がある。其の要を捉へさへすれば、其の他は之をあぐる必要もなく、否、むしろ擧げない方がよいのである。實際の物には穢い所もあり、醜い所もある。又不完全に缺けて居る所もある。必要の點以上に此等のものをも残らず擧げる時には、卻て吾等の感興を害ひ、吾等の想像を破つて、彼の

江邊の美を發揮しようとした折角の努力も、失敗に了るのである。されば唯江邊の美觀の肝要な場所をば、極めて鮮明に描いて、其の他はすべて觀者の想像に任す方が、その美觀を眞に發揮する所以である。故に美を發揮する力からいへば、雅邦的縮圖こそ眞正の縮圖である。そこで此の人生百般の姿相を捉へて吾等が美的感興の對象となし、美的趣味を満足せしめようと云ふ文學は、必ず雅邦的縮圖たり、又たるべき事は殆ど絮説するの必要もないと信ぜられる。

三 文學と人生 中

諸君、文學は何であるか。文學は人生の救である。

凡そ吾等に苦しみ、悩みのあるのは、我といふものがあるからである。我があるが故に空しき望を起し、限なき欲を逞しうせむとするのである。我があるが故に限なき名聞の奴となり、限なき黄金の僕となるのである。我あればこそ憎悪もあり、怨恨もあるのである。名聞の奴となり、黄金の僕となり、憎悪怨恨の焰に燃さるればこそ、此の世に苦しみといふものはあるのである。さればこそ菩提樹下に大悟徹底せられた聖人も、我を以て一切苦の根本となされたのである。若し吾等にして此の我執を離れ、妄見を脱するを得たならば、吾等の意は如何に安らかに、吾等の情は如何に爽かであらう。而して吾等をして此の我執を離れ、妄見を脱せしむる所の易

行道は何であるか。それは文學に外ならぬのである。吾等が美しい詩や歌を吟詠し、戯曲・小説を玩味する時には、全く身を一種の別天地に移して、一切の我執・妄見は茲に全く消滅し、讀みゆく已、讀まるる文學、一つに融けて差別もなくなり、唯唯、量り知られぬ歡樂の境にあるが如き思をするものである。しかもこれは音に一時の救のみでなく、永く、吾等が生涯に影響を及ぼすものである。固より獨り文學と謂はず、其他の藝術も、皆吾等を靈化する力を持つて居るには相違ない。併しながら音樂なり、繪畫なりは、比較的専門的技術的要素が多く、何人でも其の力に縋つて救濟を得るといふわけにはゆかない。然るに文學には比較的はその要素が少

ない。其の文字と文章とを解し得る人は、誰でも其の救濟の力によることが出来る。是、私が文學は解脫の易行道であるといふ所以である。

凡そ吾等人間を救濟するものが三つある。第一は只今述べた所の文學の力で、第二は道德モラルの力、第三は宗教の力である。文學は感情によつて直觀ダイレクト的に救濟の任務を果さうとし、道德は意志によつて漸進インクリメンタル的に救濟しようとし、宗教は其の中間に立つて、半面は情により、半面は意志によつて救濟せむとするものである。此の三者は斯くの如く、分け登る麓の路に於てこそ違へ、畢竟は同じ高峯の月を見むとするものである。かやうに考へれば、その何れの道によつて救濟を求

むるも、其の人人の自由であつて、必ずしも己に同じき者に
黨して、異なる者を伐つの必要がないことは明かである。然
るに世人は此の事を忘れて、所謂文藝派の人人と、所謂道學
派の人人と相鬩ぐが如き愚を演じてゐる。

併し斯く言へば、或は唯文學のみにより、もしくは道德の
みによりて、果して全き人格の救済が得られようか。と問ふ
ものがあるであらう。私は必ず之を可能であると信ずる。眞
に美なるものは又必ず善を兼ね、眞に善なるものは又必ず
美を含んで居るものである。善を兼ねざる美なく、美を含ま
ざるの善はない。之は必ずしもヘラス民族の經驗ばかりで
はない、又吾等の親しく經驗するところであると思ふ。され

(-) Hellas.

ば眞に美なる文學によつて救済せられるものは、人格全體
の救済であり、眞に善なる法則によつて救済せられるもの
も、矢張人格全體の救済である。

四 文學と人生下

諸君、文學は何であるか。文學は人生の力である。

將に冤罪の刃の下に、無慙の最期を遂げなむとせる禪僧

祖元が、纔かに生命を全うするを得たのは、果して何の力に

よるか。彼が死に臨んで泰然として吟詠した一絶の力では

ないか。幾多憂國の志士をして感奮興起せしめた一篇の正

氣歌は、今日猶凜として生氣あり、眞に懦夫をして起たしめ

第三回 文學と人生

乾坤無地車三孤
策喜得人空法
亦空。珍重大元
三尺劍。電光影
裏斬春風。(圓
覺寺開山、祖元)
正氣歌。(宋文天
祥)

樋口一葉の小説。

坪内逍遙の樂曲。

するの槩があるではないか。天下の婦女子をして、若し將來嫁
 するるときもあらば、原田某のやうな夫を有たじ、氣心も知れ
 ない處へは嫁ぎはせじ、と決心せしめたのは、十三夜のお關
 ではないか。徒に理想とやらにあこがれて、老いたる父母に
 さんざん歎を見せ、後でやつぱり其の父母が慕はしくなつ
 て、現實界に還つて來た、新曲浦島の太郎は、幾多熱血の涌き
 かへる青年に向つて、理想は現實を離れて求むべからず、唯
 此の現實界を宛然に淨土と觀じ、極樂と化すべきものであ
 るといふ信念を鼓吹したではなからうか。涙に沈める婦女、
 貧に苦しめる青年をして、再び生氣を呼起し、蘇生せしめる
 ものは、すべてこれ文學ではないか。文學は人生の力である。

此の力を得て此の力を利用せむとし、此の力によつて其の
 天福に與らむとする努力は、凡そ人間の努力中にあつて、最
 も神聖な、最も高い努力の一つである。宗教家は其の力を利
 用して、自己の信ずる所の福音を傳へ、政治家は其の力を利
 用して、經世濟民の具とした事、古今東西其の例に乏しくな
 る。

前段にも述べた通、文學は人生救濟の具として、道德・宗教
 と並び立つものである。従つて彼等の間には互に相聯絡交
 通する所がある。而して文學の力の、最も直接に其の影響を
 及ぼす方面は道德の方面である。今、文學創作者の立場から
 でなく、社會現象の一つとして文學を見るとときには、其の影

響は直接又は間接に益、道德を助け、道德を高尙にするか、もしくはその反對に直接又は間接に道德を破り、之を墮落せしむるかといふ問題に歸著する。

かやうにいろいろの影響があるから、見る人によつて小説の批評もちがふ。老人は「近頃の稗史・小説は實に風教を害するの甚しいものである。あれ等は嚴重に取締らねばならぬ」といひ、青年輩は「美は美である。風教を害すると害せざると我に於て何かあらむ」といつて、現代の作物を歓迎する。固より私は現代の作物を上乗ロキの文學と心得て之を辯護するものではない。併し矢張青年の言ふ様に、美は美の繩張があるから、一槩に風教云云を以てこれを止めることも出来ぬ。

さればと云つて、現代の作品をのみ得て之に満足して、更に高尚な物のあるのを遺れて居るが如きは、これ亦贊成することが出来ぬ。文學と風教との關係問題は、理想境に達しない現實の世界、現實の人生に於ては、つまるところ一時の社會政策上の問題である。現今の道德に悖戻モトするが如き文學は、一時の機宜キイとして之を禁止するのは、政策上已むを得ないことであらう。併し又一般讀者の趣味が漸漸微妙ニヒクシノコトに、漸漸高尚になるならば、文學上の作品も漸次理想に近づぐことであらう。到底理想は善美一致の境であるのである。

(藤井健次郎—時代思潮)

五 志を述ぶ

幸便に任せ、一筆申上げ奉り候。殘暑の節、益御勇健に御座遊ばされ候ことと存じ奉り候。

キヨロ去臘は色色と御世話下され、御別の刻も、御親切の條

條、肝に銘じ忘れ難く候。さてこの度、内内心事申上げた

き儀これあり候。誠に父儀士民より御取立を被り、外諸

士よりも、御國恩海山に御座候へば、その子たる者、粉骨

齏身仕候うて御奉公申すべき筈に御座候ところ、只今

の身分に相成り、致し方これなく、又假令再び御使ひ下

され候儀、萬一出來仕候とも、生得多病弱質、すこしの事

にも耐へかね候ゆゑ、甚だおぼつかなく、強ひて相勤め

*春水。廣島藩の儒者。(四〇六一二七)

候うては、卻て事を傷り、不忠不孝を増し候やうのこと出來致候やも計りがたく、且つ又私一家重疊に官祿を忝う仕候ゆゑ、一人は浪人仕る方、天道にもかなひ申すべく候はむか。又奉公仕らずとも、御報恩の致し方これなしと申すべからず候。經書講釋等は不得手の儀、得手と申しては史學文學に御座候。これにて少少なりとも御國の御用に相立ち候儀仕りたく、乃ち籠居以來日本外史と申す武家の記録二十二卷著述成就仕りをり候へども、これは區區たることにて、引用の書ども不自由、私心に満ち申さず、愚父壯年のころより本朝編年の史輯め申したき志に御座候ひしが、官事繁多にて、十枚ば

かりいたし置き候ままにて相止め候。私儀幸ひ閑人に御座候ゆゑ、父の志を継ぎ、この業を成就仕り、日本にて必要の大典は藝州の書物と、人に呼ばせ申したき念願に御座候。この儀三都に居り申候うて、書物を廣く取集め、多聞の友を多く取り申さずては出来仕らぬ事に御座候。水戸の日本史なども、江戸に史館御建て遊ばされ候は、このわけに御座候。不肖の私に御座候へども、右場處へ出で、名儒俊才に附合も致し、學業成就、名を天下に擧げ、末代までも藝州に何某と呼ばれ候はば、螢火にて月光を増し候譬にて、少しは御國の光ともなり申すべきか。

備後福山藩神邊、菅茶山の塾。

去冬^{*}此方へまゐり候件、私好み申さざる事に御座候



類山陽

へども、已に家長より願ひ出で候儀、今更辭退も仕りがたく、急に追立てられ、罷り越し候。誠に草原にて、馬子・牛飼の外は談話仕候べき人もこれなく候。廣島にをり候ひし

靈氣山郭吳龍越水天齋神青一萬萬
里泊舟天草洋煙橫蓮宮の漸波智見
大魚波智太向舟船以似月

西遊其傳書小者
山内拜 正安寺時日丑九月吉連時巳十二月庚 卷四四

同 節は、また時節
筆 もこれあり候
蹟 はば都會へ出
づることや

備後國福山藩

通稱太中、茶山
と號す、詩人。
(二四八―二四七)

と空頼に存候ひしが、今はそのたのみも絶えはて候ゆ
ゑ、日夜悲歎仕りを^致候。

然る處福山の公邊にて私を取放し申さざるやうと、
役人どもかれこれと談合仕り、私に知行取らせ、士儒に
取立て申したき旨、内意^三、菅先生より申し聞かされ候。先
生には、私所存をば承知これなく、承引仕るべき旨勸め
られ候。私こたへ候に、これは案外のことを承り候。私奉
公出來候身に候はば、本國にて仕り申すべき筈なれば、
如何やうの御勸にても、決して従ふべきやう御座なし。
と答へ候に、これは小國ゆゑきらひ候か。小國にても俸
祿はよろし。と申され候ゆゑ、私は義の一字を申し候。義

に協ひ申さざる儀に候はば、假令加賀薩摩より所望に
あづかり候とも見向も仕らぬ了簡に御座候。大恩の本
國に尺寸の勞をも盡し申さず、他國にておめおめと出
仕候こと、私畜生ならば知らず、苟も人にて御座候うへ
は、何の面目にて天下の人に對し申すべきかと申し切
り候。

右様の儀は、幾重にも相ことわり、この方申分相立て
候こともこれあるべく候へども、私多年の願望遂げ候
期はこれなきやうに相見え候。何分年少氣銳のうち^{えん}に
一度大處へ出で、當世の才俊と呼ばれ候者共と、勝負を
決し申したく存じ奉り候。家父・叔父共は、御承知の氣遣

手に御座候ゆゑ、どかく手放し候こと致しかね、爰許ココロにても、兄弟同様の太中にあづけ置き、その内に年も寄り候はば、分別なほり申すべしと心組み候へども、私は若氣のみにてはこれなく、前段の大志御座候故に御座候。この念願と申すも、人にすこしも世話をかけ、物入をさせ候こともこれなく、只一言の許を受け候はば、私一分の才覺を以て、一人口食ひ候ことは如何とも仕り、家元よりの仕送等は一錢も煩はし申さぬつもりに御座候。家父老年に相成り候うて、他處へ罷り越し候儀、いかがに御座候へども、此處にをり候も、京・大阪へ參りをり候も、五十歩百歩のちがひに候。此處にかれこれと月日を

積み候うち、菅先生養育の恩義は日日おもり候うて、去りがたく相成り申すべく、さりとても多年の念願、無になり候も、残念至極、いかが仕るべきかと案じ煩ひをり申候。何卒尊公様の御憐愍アハレミにて、人一人御救ひ下され、本意を遂げさせ下され候ことは出来申すまじくや。さやうにも相成り候はば、英氣は百倍仕り、多病の身も學問出精、天下の人に一人も追付かせ申さざる了簡に御座候。

かやうの存念、廣島にをり候ひし節より申しあげたく存じながら、憚おほく、時節も到來仕らずと存じ、黙止仕りをり候へども、尊公様ならでは、この儀御決斷下さ

れ候人はこれなく候ゆゑ、この度憚を顧みず、生涯の浮沈と覺悟相極め申しあげ候。懼れながらよくよく御勘辨下され、何卒尊公様の御心附として仰せ出され下さるべく、もし尊公様御取計らひにて、私生涯の大望御遂げさせあそばされ候はば、この御恩、生生世世忘卻仕るまじく候。心事盡し難し、萬萬御推察あそばされ下さるべく候。頓首敬白。

七月二十六日

賴久太郎襄

築山奉盈先生 案下

(賴山陽「山陽外傳」所載の文節略)

文化七年(山陽時三十一歳)
廣島藩用人、山陽の武術の師。

元寇

北條時宗、爲人強毅不撓。幼善射。弘長中、大射於極樂寺。第將軍欲觀小笠懸、顧命諸士無敢應者。時賴曰、太郎能之。太郎時宗、幼字也。召而上場。時年十一。跨馬出一發而中。萬衆齊呼。時賴曰、此兒必任負荷。當是時、宋氏爲胡元所滅、諸鄰國皆服於元。獨我邦不通使聘。元主忽必烈令韓人致書於我曰、不服則尋兵。朝廷欲答之。下鎌倉議。時宗以其書辭無禮、執爲不可。元主復遣使者趙良弼來。時宗令太宰府逐之。凡元使至、前後六反、皆拒不納。文永十一年十月、元兵可一萬來攻對馬。地頭宗助國死之。轉至壹岐。守護代平景隆死之。事報六波羅。令鎮西諸將赴拒。少貳景資力戰、射殪虜將劉復亨。虜兵亂奔。而元主必欲遂初志。後宇多

一九三四

五 志を述べ

三二

一九三五

天皇建治元年、元使者杜世忠、何文著等九輩、至長門、留不去。欲必得我報。時宗致之鎌倉、斬于龍口。以上總介北條實政、爲鎮西探題、遣東兵衛京師。西兵衛者、悉從實政、益築太宰府水城、省充費、充兵備。

一九三九

弘安二年、元使周福等復至宰府、復斬之。元主聞我再誅使者、則憤恚、大發舟師、合漢、胡、韓、兵、凡十餘萬人、以范文虎將之入寇。四年七月、抵水城、舳舻相銜、實政將草野七郎、潛以兵艦二艘、邀擊于志賀島、斬虜首二十餘級、虜列大艦、鐵鑠聯之、穀弩其上。我兵不得近。河野通有奮前、矢中其左肘、通有益前、仆檣架、虜艦登之、擒虜將玉冠者、安達次郎、大友藏人踵進、虜終不能上岸。收據鷹島。時宗遣宇都宮貞綱、將兵援實政、未到。閏月、大風雷、虜艦敗壞。

肥前松浦郡

少貳景資等因奮擊、鑿虜兵、伏屍蔽海、海可步而行。虜兵十萬、脫歸者纔三人。元不復窺我邊、時宗之力也。(賴山陽)

六 現代の文學

維新の偉業正に成りて、開國の國ワカキ是一度定まるや、世間は西洋の物質的文明の輸入に急にして、和漢の學術、技藝を顧みるに違あらざりき。況や美術、文藝のことの如きは全く無用の長物とせられて、幾多の國寶は破棄せられ、無数の古典は廢紙となりぬ。この間にあつて、纔かに文學の微光を存せしものは、獨り新聞紙なりき。

新聞紙の刊行は、これ亦西洋に學びしものにして、當初は

専ら政治論の機關たり、實用功利の論に非ざれば、以て時代思潮に追隨するに足らずとなしたりき。されど普通教育の制度漸く國內に普くして、文學の知識が中流以下の社會に擴張せらるると共に、新聞紙の經營者も、亦これ等の讀者に對して、その娛樂となるべき文藝の作物を供給せざるべからざるを知りぬ。かくて幕末以降久しく失意の地にありし戯作者が、所謂續き物と稱する合卷風の小説を紙上に掲げ初めしは、蓋し明治文學の萌芽なり。

從來、筆を政治論にのみ執りたりし人人も、この種の文藝の人心に影響することの速かなるを認めて、或は英佛の政治小説を翻譯し、或は新に架空の脚色を立てて、自家の主張

柴東海著。
未廣鐵腸著。
矢野龍谿著。

を具體的に説明せむことを企てたり。佳人之奇遇、雪中梅、經國美談等は當時最も喧傳せられしものにして、慷慨激越の調時に青年者流を感奮興起せしむるものなきにあらざりしかど、その豪放粗大の文は未だ人情の機微に入らず、眞に文學の眞諦を得たるものといふに足らざりき。

さもあれ明治は既に十七八年を經たり。西洋の學術も技藝も稍咀嚼せられたり。世の先覺者は、かの徒に物質の皮相にのみ腐心するの愚なるを悟りぬ。文藝美術の評價も日に漸く高からむとせり。この勢に乗じて坪内逍遙等が文學論の出づるあり、硯友社一派の新に旗幟を樹つるあり、在來の戯作者系の人人もこれに呼應して立てり。ここに所謂才筆

家にもあらず、政論家にもあらず、熱誠なる態度を以て、直に人生を描破せむとするものは、將に踵を接して出でむとせるなり。

思ふに、新文藝の勃興は、半ば西洋文藝によりて啓發せられたり。されども他の一半は我が國の古文學に淵源せるものなることを忘るべからず。蓋し維新以來日に隆なりし西洋文明の謳歌は、ここにその極に達して、その反動たる國粹保存論は盛に唱道せられ、國語教育の獎勵、古文學の研究が隆昌を極めしは、あたかもこの頃なりき。されば新文藝の先達は、啻に西洋の文學のみならず、我が國の古文學に回顧し、或は中古の文學に私淑するあり、或は元祿文學に摹倣する

あり。輕妙なる才筆を以て一時に鳴れる饗庭篁村は、八文字屋に學びたるものにして、又我が文壇の泰斗として、新篇出づる毎に路湯の紙價を貴からしめし尾崎紅葉と幸田露伴とは、ともに西鶴を學びてその新文體を創めしものなりき。紅葉が豔麗の致は才人の情緒を寫すに長じ、露伴が遒勁の調は巧に男兒の意氣を描きぬ。されどその題材は稍單調なりき。良久しうして世間は、その反復に倦みぬ。乃ち變化を求めて、或は探偵小説、冒險小説、俠客小説等の複雑なる脚色に喝采し、或は慘澹たる事件を敘したる所謂觀念小説、悲痛なる苦悶を抒べたる所謂心理小説、或は神怪不可思議なる妖怪談、或は淫靡不道德なる戀愛談と、幾度か流行は變遷し

三尾雪嶺
井上四了
志賀重昂

つつ、その取材は日に日に人生の暗黒面に向つて進み去らむとせり。その間、或は光明小説といひ、家庭小説と號する道徳的傾向ある作物の行はれしものなきに非ずと雖も、皆膚淺陳套、未だ人心の要求をみたし、人生に理想を與ふるものにはあらざりき。

この時に方りて、東洋の一小島國は日清、日露の大役を経て、俄然一等國の伴に伍せり。戰勝に酔ひし豪華の餘弊と、避け難き財政上の壓迫とは、我が國民が生活難の聲として青年の耳朵に響きぬ。顧みれば、嘗ては文藝の形式をのみ評論したりし批評家は、漸く人生の研究に轉進し來りて、或は高山樗牛が美的生活論となり、或は綱島梁川が見神説となり、

或は自然主義といひ、無理想、無解決と呼び、在來の一切の教權を放下すべしとさへ説く者あるに至りぬ。既に生活難の聲に慄ける青年は、徒に多岐に惑ひて、唯煩悶するのみ。而して所謂自然派の小説は、益、人生の暗黒面を誇張して、好みてかの悶悶として焦燥し、狂奔し、疲憊困頓、蹣跚踉蹌たる敗殘の青年を描きつつ、以て人生の實相を盡したりとなせり。煩悶せる者が、暫くここに同情の慰安を得たる如く感ぜしは、蓋し一時の迷想のみ。今や世間は漸く混沌たる思想界を出でて、更に高く、更に深き人生の眞意義を捉へおとして、倫理に、哲學に、宗教に、文藝に、秩序ある討究を重ねむとせり。思ふに、我が小説界が崇高偉大なる理想に達著して、向上の一路

を發見すべきは、甚だ久しからざらむとするなり。

今迄
上來、主として小説の變遷を敘したり、最近の文壇に於て

最も注目すべきはこの種の文藝なればなり。さもあれ上古

以來、常に流行し來りし抒情、敘景の小詩形も、亦甚だ衰へた

るには非ず。

自らの感傷を述べた文
景色の有るものも多し、
主として觀せしむべき文

歌道には桂園の流を汲む者多く、俳道には、蒼虬、梅室の門

派のみ獨り盛にして、和歌・俳句といへば、専ら活社會と交渉

なき閑人・隱者の間に行はれしもの、明治初年の大勢なりき。

但し所謂幕末の志士、又は國學者の和歌には、露骨なる程、當

時の社會の現況に接觸したるもの少なからずと雖も、その

詩的價値に至りては疑なき能はず。後年、かの國粹保存論、國

香川景樹の流派。
天保時代の所謂
月並調の名人。

文學研究等の盛なりし時に至りては、落合直文等とその門

下生との手によりて、歌道はまづ青年の社會に入來りぬ。か

くて偏に風雅を生命とせる月花の天地を小なりとして、活

社會の人生を歌はむとする傾向を生ぜり。俳道には正岡子

規出づるあり、天保の俗調を排して、清新なる天明調を復活

せしめ、更に進みて淡淡たる寫實の妙趣を鼓吹し、唯俳句の

みならず、寫生文と稱する小品文の流行をも促しぬ。この派

より出でて、筆を小説に著けたるものに夏目漱石等あり。

この他、明治の新文藝としては別に新體詩あり。當初は外

山、山等が新體詩抄の調なりしが、その詞藻の稍乾燥なる

に嫌らざるものは、或は中古語を以て西歐の詩趣を傳へむ

とするあり、或は漢語を用ひて五七の單調を破らむとするあり。中頃島崎藤村が溫雅優美の調、土井晚翠が縱橫跌宕テントの風、最も青年の間に喜ばれたり。今や、新詩の格調日に新なりと雖も、或は險怪ウチ、或は蕪雜ガツパナ、未だ雄渾偉大オキイ偉大にして眞に國民の詩歌と稱すべきもの、頗る稀なるに似たり。

更に純文藝の範圍を出でて、専ら一代の文章の模範となりしものを求むるに、かの漢文直譯風の文章が流行したりし日に於ても、既に福澤雪池、福地櫻癡、成島柳北等の平易明快なる文字あり。降つては、三宅雪嶺、徳富蘇峯、坪内逍遙、森鷗外、高山樗牛、大町桂月等あり。その文各特色あり、長短ありと雖も、皆縱橫自在にして、言はむとする所盡さざるはなし。現

代の所謂普通文は、純文藝の著作よりも、寧ろこれ等の人人の筆致オモテに負ふ所多きに似たり。

七 園 守

淡雪融けて	あらはるる
土の濡れ色	新しう、
去歳の宿根 <small>まね</small> の	よみがへり、
今歳の二葉	萌初 <small>いこ</small> むる。

夢に酒なく、	戀も無く、
覺めて現 <small>うつ</small> に	願望 <small>ねぞみ</small> なく、

ただ花を待つ 園守と

我が名呼ばれて 微笑みて、

身を陽炎の 中にして、

土塊碎く 細齒杷。

照る日のゆふべ 井を汲みて、

やさしく恵む 如露の水。

摘みては除く 醜草の

庭蘿葡やら 鷹の爪、

取りては棄つる いまはしの

氣條蟲また 根切蟲。

老の命の せまり行く

それは思はで、 初花の

そのあかつきに あこがれて、

日日に心も 身も使ひ、

土の澀氣に 指あれて、

日に焼け黒む 顔の色。

春の御神の あたたかき

御心香る 風吹けば、

その神靈なす 神業を

たたへまつりて 鳥歌ひ、

そのうるはしき
みなさけに
心勇みて
胡蝶舞ふ。

春の御神の
愛深き
御心の隈
おもしろや。

深山の奥の
童部は
山の蕨を
賜はりて、

田つくる里の
少女には
田芹を摘めと
賜ふなり。

花を待ちたる
園守に
終に賜ひぬ
花幾朶。

待ち得し花の
笑顔見て、

小鉄片手に
煙草吸ふ、

老いたる今日の
園守の

顔にもゑみの
花ぞ咲く。

我ただ花を
待ちぬべし。

我園守と
身をなさむ。

我つくるべき
詩を知らず。

我なりいでむ
詩を思ふ。

廬に神在す、
神います。

我ただ廬の 我が神の

玉の御聲を 聞かむのみ。(幸田露伴―出廬)

記三浦氏草櫻

路歴忍城訪芳川襄齋聞市醫有三浦泊翁者善培養草櫻多珍異拉襄齋往觀焉草櫻俗間所稱余未詳漢名爲何而其狀肖我邦櫻花而色紅者其常也今三浦氏之草櫻其爲瓣有單有重有大有小有疏有密其爲狀有如海棠者有如金沙羅者如酴醾者如茉莉者如麗春者或如棣棠或如梔子其他殊類詭形不可縷狀其爲色有紅有白有紫有碧而紅有肉紅有嬌紅有淡紅有鮮紅有殷紅有粉紅深紫淺紫不同其色雪白月白各從其類水碧

石青或暈或纈或倒暈或間雜或色同而狀異或形肖而彩殊其爲品幾三百栽以磁盆盆各插一小牌以標其名架閣三面排列於其上前低而後昂花彩爛斑如張錦繡奇異珍詭過於所聞余因問其術翁曰是無他術也能節其燥濕時其寒溫擇其肥土之物勿過勿不及如愛子如育嬰而見其有稍異者輒別而栽培之使以成其異見其有少珍者則分而植養之使以成其珍如斯而已矣大凡物之有珍異不止草櫻也唯其珍異者尤難於栽培而養之者不知其珍異分別而培養之是以雖有珍異不能自成其珍異與凡卉同歸於腐朽豈不悲哉余聞而歎曰翁蓋以諷世也乃記之。(藤森弘庵)

八 徒然草抄

一 折節のうつりかはり

(二) 春はただ花のひとへに咲くばかり、物のあはれは秋を優れる。(拾遺集、讀人知らず)

折節のうつりかはるこそ物ごとにあはれなれ。物のあはれは秋こそまされと人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いまひとときは心もうきたつものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草もえ出づる頃より、やや春ふかく霞み渡りて、花もやうやうけしきだつほどこそあれ、をりしも風雨うちつづきて、心あわただしく散りすぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにただ心をのみぞなやます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅のにほひにぞ、古の事もたちかへりこひしう思ひ出で

(三) 五月待つ花橘の香をかげば、昔の人の袖の香ぞする。(古今集、讀人知らず)
(三) 色よりも香こそあはれと思ほゆ

らるる。山吹のきよげに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすて難きこと多し。

「灌佛の頃祭の頃、若葉の梢涼しげに茂り行くほどこそ、世のあはれも人のこひしさもまされ」と、人の仰せられしこそ

ふみ白き草もよすせけり
あしのやれきものかこむあまのこ
しづかしのいづれもまて

吉田兼好筆蹟

げにさるものなれ。五月あやめふく頃、早苗とる

頃、水雞のたたくなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓

八 徒然草抄

れ、たが袖ふれし宿の梅ぞも。(古今集、讀人知らず)
(四) 賀茂の葵祭。

ミトワキヤクイ

またをかし。

七夕まつるこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づくほど、早稻田かりほすなど、とりあつめたる事は、秋のみぞ多かる。また野分のあしたこそをかしけれ。

十二月十九日、
三日間、佛名を唱ふる公事。
御陵と功臣の墓とに幣帛を奉る敬使。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとどまりて、霜いと白うおけるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて人ごとにいそぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじき物にして見る人もなき月の寒けくすめる、二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名荷前の使立つなど、あはれにやむごと

十二月晦日の夜に、悪鬼を追ふ公事なり。
元旦寅の時に、天皇、四方及び山陵を拜し給ふ儀式。

なき。公事どもしげく、春のいそぎにとりかさねてもよほし行はるるさまぞいそじきや。
追讎より四方拜につづくこそおもしろけれ。つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして、夜半すぐるまで人の門たたき走りありきて、何事にかあらむことごとしくののしりて、足を空にまどふが、暁がたよりさすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心細けれ。亡き人のくる夜とて魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方にはなほする事にてありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、きのふにかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなる

こそまたあはれなれ。

二 猫また

「奥山に猫またといふ物ありて人を食ふなる。」と人のいひけるに、山ならねども、これらにも猫のへあがりてねこまたになりて、人取る事はあなるものをといふ者ありけるを、何阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の、行願寺の邊に在りけるが聞きて、獨りありかむ身は心すべき事にこそと思ひける頃しも、ある所にて夜ふくるまで連歌して、唯ひとり歸りけるに、小川のはたにて、おとにききし猫また、あやまたず、足もとへふとよりきて、やがてかきつくままに頸のほどを食はむとす。きも心もうせて、ふせがむとするに力もなく、足もた

*京都一條、賀茂神社の附近にありき。

たず、小川へころび入りて、たすけよや、ねこまた、よや、よやとさけば、家家より、松どもともして走りよりて見れば、このわたりに見しれる僧なり。こはいかにとて、河の中よりいだき起したれば、連歌のかけ物とりて、扇・小箱などふところを持ちたりけるも水にいりぬ。希有にしてたすかりたるさまにて、はふはふ家に入りけり。飼ひける犬の、くらけれど主を知りて飛びつきたりけるとぞ。

三 人の心すなほならねば

人の心すなほならねば偽なきにしもあらず。されどおのづから正直の人などかなからむ。おのれすなほならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。至りて愚かなる人は、たまた

ま賢なる人を見てこれを憎む。おほきなる利を得むが爲に
 少しきの利を受けず、いつはり飾りて名を立てむとすとそ
 する。おのれが心にたがへるによりて、このあざけりをなす
 にて知りぬ。この人は下愚の性うつるべからず、いつはりて
 小利をも辭すべからず。かりにも愚をまなぶべからず。狂人
 のまねとて大路を走らば、則ち狂人なり。悪人のまねとて人
 を殺さば悪人なり。驥キを學ぶは驥キのたぐひ、舜シユンを學ぶは舜シユンの
 徒なり。偽りても賢を學ばむを賢といふべし。

四 花と月

花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむか
 ひて月を戀ひ、たれ籠めて春のゆくへ知らぬも、なほあはれ

*たれこめて春の
 ゆくへも知らぬ
 まに、待ちし櫻
 もうつるひにけ
 り。(古今集、藤
 原因香)

になさけ深し。咲きぬべき程の梢散りしをれたる庭などこ
 そ見所おほけれ。歌の詞書詞書にも、花見にまかりけるに、早く散
 りすぎにければ。とも、障る事ありてまからで。など書けるは、
 「花を見て」といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを
 慕ふならひはさる事なれど、殊にかたくななる人ぞ、この枝、
 かの枝散りにけり、今は見所なし。などはいふめる。よろづの
 事は始終こそをかしけれ。望月望月のくまなきを千里の外まで
 眺めたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いと心深う、
 青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、
 うちしぐれたるむら雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎
 柴・白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこ

そ、身にしみて、こころあらむ友もがなと、都こひしうおほゆ
れ。
此の鑑味をかいたるたかひのいしと

すべて月花をばさのみ目にて見るものかは。春は家を立
去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いとたのも
しうをかかきしうしけれ。(吉田兼好「徒然草」)

九 古今東西を包容せよ上

骨董店に入れば、火鉢・香爐・木像・器皿等、鏽びもしくは煤け
たる所に何等かの趣味の存するを認む。轉じて當世の裝飾
品を取扱ふ店に入れば、金銀・玻璃・燦爛として人目を眩耀し、
その美麗なること、骨董店の薄暗きと殆ど晝夜の別あり、し

かも見る事入しくして興味の竭くるを覺えずとせず。蓋し
前者は全く過去に屬し、而して後者は單に現在に止まる。過
去現在の差あれども、ある一時代に限らるるや即ち一なり。
若し最も價值ある者を求めば、過去現在を通じて、なほ將來
にも及ぶべきを想はざるべからず。舊製と新製との如き、深
く問ふべき所ならず。

繪畫にありても、雪舟(二二六)や元信(二二七)や探幽(二二八)や光琳(二二九)や、皆大いに賞
讃すべきも、油繪を見慣れし眼よりすれば、種種の缺點を指
摘すべく、中には遠近法の見苦しきあり。されど普通の油繪
もまた永く賞美するに堪へず。油繪の畫工は常に舊東洋流
を斥くるのみならず、互に派を分ちて技巧を競ふに專なれ

雪舟(二二六)
元信(二二七)
探幽(二二八)
光琳(二二九)
尾形光琳(二三〇)

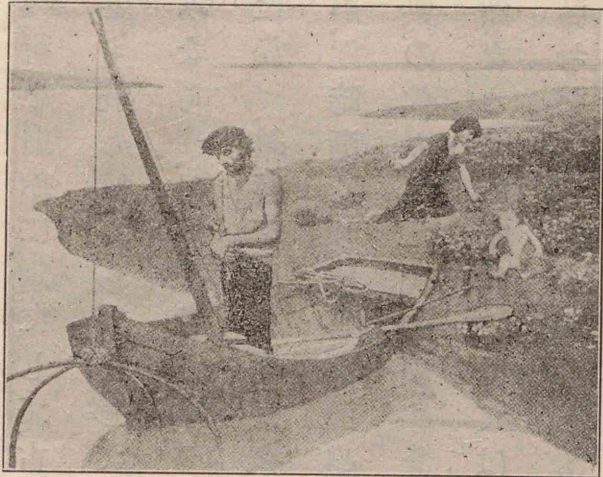
* Chavannes.
(1824—1898)
佛國の畫家。



狩野元信筆

ど、その大家と稱せらるるものは、徒に一時代に拘拘たらず、古今東西に亙りて戻らざるものの如し。かのシヤヴァンヌシヤヴァンヌの如き即ち然り。人も物も或一時代に限れるは、それだけ規模の小なるものなり。大なれば大なるほど益、時代を超越する所あるべし。

時代を超越すとは、己の時代に關係なきの謂ならず。能く時代の變易を凌あきぎ、十百世の後に及ぶも化石扱にせらるることなく、依然として存命するの謂なり。



シヤヴァンヌ筆

英雄・豪傑として傳はれりとして一槩に稱すべきに非ざれど、その主なる者の、百世の下なほ健在するが如くなること争ふべからず。人は必ずしも英雄・豪傑として顯れざるべからざる理なく、その然るは境遇に因るもの多くして、特に希望して得らるるに非ず、又必ずしも希望すべきに非ず、或は無名にして終るの卻て貴ぶべきあれども、若し修

學よりも希臘羅甸を推ししほどにて、偏固カククツヨクと呼ばれるを免れざりしかど、その彼が如くなりしは一分の理なしとせず。彼は學者中の世間通にして、優に紳士として交際場裏に出づるを得たり。しかも學術に關しては曰く、吾はみづからの經驗に徴して、今日の學問に反對す。今の所謂知識は切りて乾かしたる知識にして、插花ヤウカと同一の運命を有す。一夕の觀賞に供すべけれども、日ならず凋萎カウイして、何の殘る所無し。眞の知識は斯くの如くならずして、必ず一生涯に亙りて繼續するを要す。即ち始あり、中あり、又終ありて、常に生命の充つるを要す。かかる知識は外觀に於ては少量と見ゆべけれども、實に生涯に必須なる知識の甚だ少量なるを察せざるべ

他山之石
可以攻玉

からず。この言老人の頑癖に出でしに似たれど、少壯者は自己のたまたま、所を辨てこれをも。他山の石と心得て可なり。今の活社會に立ちて活運動を爲自らを磨き、ついでにさむとする者は、煩瑣ワザワザなる事理に通ずるよりは、人間の如何に活動するかを具體的に識得するを善しとすることあり。新知識の日に月に増殖する今日に於ては、往日の如く古典に耽るを得ず。古典を讀む者も年を逐うて減ずべけれども、幾許かこれに通ずるは、その人の修養に益し、併せて公共に處するの術に益せむ。

新學問・新知識のみにては完備せる紳士となり難し。日夜實驗室に顯微鏡を覗ふ人にして、立派なる紳士たる者無きにあらざれども、晴の場所に活躍する者は、更に古今を達觀

し、英傑の出處進退（つひ）に通ずるの便利多きを見む。世は過現未の集合なり。世間の多くはその一部分に拘り、或は過去に頭を没し、或は現在に齷齪し、或は徒に將來を想望すれども、多少（正々まごのまご）にても經綸を意とせば、斯く一時期に偏せずして、宜しくすべての上に大觀する所なかるべからず。世界の基督教國民が二三年前の猶太の歴史を諳誦するを觀ても、その如何に過去に篤きかを推すに足らずや。舊約全書の瑣談を記憶すると、希臘羅馬の史傳に通ずると、いづれか知識に益すべき。一を取らば他の一を捨つる理なきに非ずや。新事に交へて古事を語り傳ふるは、冥冥裏（かげかげ）に人生に影響し、風俗を敦厚にして、趣味を豊富にするの效あり。近來古典を學ぶ事漸

く衰へたれども、之これを學ぶものの少なきにあらず。品性を重んずる家族にては、舊に依りてこれに重きを置き、人格陶冶を事とする大學にても亦然り。彼に在りては稍品位ある紳士は、希臘羅馬の事蹟を現代同様に語り得ざるを恥辱とす。過ぎたるは猶及ばざるが如く、その甚しきに失するの弊害たるは勿論なれど、苟も然らずんば則ち修養に益すること鮮少ならざらむ。

近頃國人の瑣事（リサイユネ）に齷齪し、眼前の利益に汲汲たるは、世態の複雑に赴きて、ただ大體に通ずるのみにては事を處するに堪へざるに因ると雖も、又偉人物の胷中に風月洗ふが如きものあるを聞かざるに因る。傍人を見れば、或は皆滔滔と

して小利・小害を争ふの觀あるべしと雖も、古に溯り、遠きを尋ぬれば、必ずや我を教へ、我を導くに十分なるものあらむ。現代の新學問・新知識は飽くまで修むるの必要あれども、少しにても遊ぶの餘裕あらば、歴世の人豪を想察し、古今東西を包容せむことを期するを要す。知識の進歩は歲月と地方とによりて異なれども、人格の進歩は爾く著しからず。現在に專なるものは開口廣けれども、與行なし、更に與行を深くするの心得なくして可ならむや。(三宅雪嶺)

君子有五樂

君子有五樂。而富貴不與焉。一門知禮義、骨肉無罅隙、一樂也。取

予不苟廉潔自養、內不愧於妻孥、外不作於衆民、二樂也。講明聖學、心識大道、隨時安義、處險如夷、三樂也。生乎西人啓理窟之後、而知古聖賢所未嘗識之理、四樂也。東洋道德、西洋藝術、精粗不遺、表裏兼該、因以澤民、物報國恩、五樂也。(佐久間啓)

一一 草木を愛し自然を喜ぶ上

氣候は溫和である。山川は秀麗である。花紅葉、四季折折の風景は誠に美しい。かういふ國土の住民が現生活に執著するものは自然である。四圍の風光の客觀的に我等の前に横はるものは、すべて笑つて居る中に、住民が獨り笑はずには居られぬ。さればまた現世を愛し、人生生活を樂しむ國民が、天

底津の根

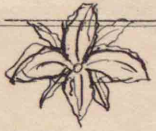
草木の蔓
カケモノ

地山川を愛し、自然にあこがれるのも當然である。この點に於ては東洋諸國の民は、北歐羅巴人種等に比べれば、天の福德を得て居ると言つてよるしい。殊に我が日本人が花鳥風月に親しむことは、吾人の生活いつれの方面に於ても見られる。

上代に於ての衣食住は、多く我が國土に繁茂して居る植物界から材料を取つた。千木高知といふ千木も、太敷立といふ宮柱も、皆木材であつたことは言ふまでもなく、藤葛を以てこれをくくりつけたのが、綱根ゆるぐ事なくといふ綱根である。楮衣チシのシシハハタタへへ麻衣マのアアララダダへへ草木の汁でこれを染めたのが摺衣スリゴロであつた。正木マキ日蔭等ヒカゲの蔓草マクワを取つてかつ

らとし、手織タスキともした。外國人の様に、又蠻人の様に、鳥の羽獸の皮を著飾つたことは一つも見えて居らぬ。少彦名神シヤコナカミが「以モ鷓鴣羽セムギ爲衣」とあるのは單一の異例で、黒川眞頼翁は「これは外國から來られた神だからだ」といつて居られる。鷓鴣草セムギ茸モウ不合尊アヘナの御名によつて、鷓の羽で屋根を葺いたといふことは分るが、家の屋根としては、鷓の羽茸の屋根などは誠に優美なものであらう。鹿の角を廊下中に竝べて置く歐羅巴人の趣味とは違ふところがある。梓スズキ櫃ヒツ檀タンを以て弓を作り、柳ヤナギ篠シノを以て矢を矧シいだ。柳は矢の木である。葉磐ハヒ葉椀ハヒは木の葉を編んだものらしく、今の茅卷チボ柏餅カシハもちにその名残を留めて居る。萬葉集の

炊葉



家にあれば笥ケに盛る飯を草枕カシ

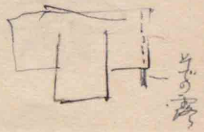
草枕(カシ) たびにしあれば椎の葉に盛る。(石馬皇)

といふ歌で、上代の風俗も分る。到る處植物の繁茂した國土は、國民に向つて衣食住の材料を、すべてそれから取らしめたのである。

日本の少女の著物の模様のはでやかなのは、西洋人の著書にもいつも歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、尙更にこれよりも綺麗である。自然に衣服にもこれが染まつて來る。昔のしのぶシノブのすり衣スリイ、今の振袖模様裾模様フリス、つまりは同じ事である。菊や櫻や梅や牡丹を大きく染出した縮緬シロリ・友禪トモセン・繻珍シロリの帯から下駄の鼻緒の先まで、自然界の草木・花



模様で飾つてある。その色合の名稱でも、櫻色・桃色・山吹色・栗色・葡萄色・黄楡カガ・木蘭地モクランヂ・朽葉クハなど、植物界から取つた名が多い。むかしの女装束キモノは櫻重ね梅重ね山吹重ね等、重ねの色合は、つねに四季折折の花に因ケテんであつた。裳モには海部ウミベとて大海の景色を畫き、腰には唐草が縫うてある。やさしい女流の装束は當然ともいはうが、武士の戦争に出でたつ甲冑装束にも、小櫻コウ・威卯オウの花威オウ・澤瀉セリ・威齒オウ・朶革トカ威オウなど、如何にも優美では無いか。總トトじて我が國の甲冑は、當時の平服のはでやかなのに似合つて、如何にも美しい美麗なものである。西洋の甲冑カウの蝦エビその儘の具足とは比較にならぬ。西洋のはどこ迄も洋服式で、我が國のはどこ迄も衣冠束帶イカンソウドの式であつた。胴にも



吹く風を勿來の關と思ひしに、道もせに散る山櫻花。源義家行きくれて木の下蔭を宿とせば、花や今宵の主なりました。(平忠度)

唐草を畫いたり、裾金物にも蝶をつけたり、菊の花をつけたりした。直垂の菊綴、その袖の露といふ名稱、甲冑にも杏葉とか、草摺とか、菱縫の板とか、いづれもやさしい名稱である。馬の鞍にも青貝をおいて花などが散してある。銜にも杏葉銜がある。軍記物語の武將の出立を讀んで見ると、どうしても極彩色の土佐繪を見る心地がする。それであるから、吹く風を勿來の關と歌ひ、行きくれて木の蔭を」と歌つても、よく似合ふのである。西洋の蝦甲冑では似合ふものでは無い。旗物にも獅子の頭や鬼の首などを附けないで、蝶や笹龍膽や澤瀉を附ける。皇室の御紋も菊と桐とで、徳川家は葵である。今日の家家の紋にも桔梗、櫻、梅、鉢、澤瀉、葵、牡丹、鳶、梶の葉

藤、松等の類が最も多いのは當然の結果である。我等の日常が如何に植物及び自然界に興味を有するかを食物の方面に見れば、春秋の彼岸の牡丹餅、御萩の名を第一として、菓子屋の目録を一見して一層その多い事が分る。名稱ばかりでは無い、形も花木に取るのが多い。干菓子は別して松の葉や菊の花や、すべて花木の形につくるのである。蓬萊の島臺は今も儀式の時に用ひられるが、魚類の料理も亦植物界自然界とは離れぬ。さしみのつま、鮓のつまには笹の葉をつかふ。強飯を贈るには重箱に南天の葉をしく。料理の膳、椀は金蒔繪で花木の形を裝飾とする。漆器、陶器、一切の美術工藝品が、草木、花鳥の繪であることは固よりいふまで

もない。これは裝飾美術として近世の歐羅巴の美術に尠あぐなからぬ影響を與へたものである。茶茶の湯湯の棗棗などは當然としても、俗に匙匙を散蓮華散蓮華といふなども優美である。室に通れば、床の間には、花鳥の極彩色か、又は墨繪の山水がある。床の間の活花は何流か知らぬが、恰好よく手際よく活けてある。欄間欄間の彫刻も唐草や竹や梅の模様である。

插花の術、箱庭作り、盆景の山水、みな我が國人獨得の伎倆であつて、獨得の發達をして居る。繪畫では生生した花木の色、禽鳥の飛動して居るさまなど、西洋の靜物になれた目には珍しく感ずるに相違ない。すべて花を活けるにも、これを畫くにも、その生きた儘に、自然の儘にするのが美しい點で

ある。枝をむしり取つて花ばかり挿しこむのは西洋の花瓶であるが、自然の枝根その儘に、天地の配合よろしくあらはすのが、活花でも盆栽でも、日本人の長所である。日本人は眞に自然の友である。よく自然の心を解したものである。キキ

一一 草木を愛し自然を喜ぶ下

我が國の文學に自然を吟詠したものの多い事はいふ迄もない。繪畫が花鳥を以てまさつて居る事や、彫刻も人物よりも花鳥の方が多く、音樂も人聲よりも自然の音色に近い事や、又宮殿の朱塗の建築も、松杉の茂つた背景によつて一層その美をなすが爲に、市中の神社があまり美觀をなさぬ

事などを考へてみれば、我が國の古來の文學が、自然美をうたふことを殊に長所とし、生命として居つた所以はわかる。上古から近世に至るまで、歌の大半は花鳥風月の題詠であつた。

古今集、讀人知らず。

ゆきのうちにはるは來にけり、鶯の

こほれるなみだ今やとくらむ。

同、藤原敏行。

秋の夜の明くるも知らず鳴く蟲は、

わがごとものや悲しかるらむ。

などは、日本人が鶯やきりぎりすになつて歌を詠んだのである。散文の中にも、

源氏物語。

山風にたへぬ木木の木の葉も、峯の朽葉も、あわただし

うあらそひ散れるまきれに。……

鳴

源氏物語。

鹿はただ籬の下に佇みつつ、山田の引板にも驚かず、色こき木どもの中に交りて、うちなくも憂へがほなり。瀧の聲はいとど物思ふ人を驚かし顔に、耳かしましう轟きひびく。草村の蟲のみぞ、よりどころなげに鳴弱りて、枯れたる草の下より、龍膽のわれひとりのみ心長うはひ出でて、露けくみゆるなど、皆例の事なれど、をりから處からにや、いと堪へがたき程の物がなしさ。

といつたのなどは、鹿も瀧も草も蟲も一切の景物、皆われ等同様の性情を有するものと見做したのである。修辭學では

これを擬人法といふが、擬人法はつまり天地・自然を人と同じに見たものである。人と天地・自然とが融合したのである。この天地と一體になつて融合するといふことが、我が和歌の生命であり、和歌を基礎とした多くの文學の生命であつた。人の感情を敘べるのにも、皆自然の景色をもつて表すのである。涙の瀧といひ、袖の時雨といひ、露の袂といひ、花の心といひ、思の煙といひ、頭の雪といひ、消えいるといひ、時雨るといふ。自然の景色の語は、直に吾人の感情の語である。人事と自然とを比較して、人生より直に自然をおもひ、自然よりも直に人生を思念するのである。これが和歌から導かれて、國文學全體を通じて、軍記・謠曲・淨瑠璃等一般のものゝの根

*Convention.
習因
慣襲

柢をなして居る。秋風といへば寂しいことを連想し、春雨といへば暖い静かな感じがある。歌の語は一つのコンヴェンションをなして、一種の情景を連想させる力をもつて居る。俳句はこれを利用して、十七字の小詩形をなし得たのである。

春秋の争は、神話時代に已に春山霞男ハルヤマカミと秋山下冰男アキヤマヒコといふものによつてあらはれて居り、萬葉集になつては、額田女ノリノ王は、紅葉をば折りてぞしぬハルノハと、春に對して秋山のあはれハルノハをたたへられた。源氏物語の六條院では、紫上ムラサキノミヤ秋好中宮に春の好みハルノヨミがあらはれて居る。四季の風景を敘して、清少納言が「春はあけぼの」から書きはじめ、兼好法師は「折ふしのうつ

法の代
本を以て

りかほるこそものごとにあはれなれ。などと書いたが、貝原益軒も四季を、室鳩巢も春秋の争を論じてゐる。四季の風光は一日も我が國民の頭から離れたことは無い。この四季の景色と人事とを結び付けて感ずることは、即ちあはれを知るのである。源義家や源頼政や平忠度が、如何に日本武士として優にやさしく感ぜられるかは、このあはれを知つたといふことがあるからである。太田道灌に關する「みの一つだに無きぞかなしき」の話は、史實ではなくして傳説であらうが、歌を好んだ武士であるから、ああいふ傳説が附いたのである。頼朝も尊氏も秀吉も、暇のある時には風流の技を翫んだのである。狂言の萩大名は、大名の癖にこの風流を解せぬ

人知れぬ木の

山守は木

あはれをの

月正見、あら

からをかしいのである。風流といふこと、詩的といふことの意味は、自然に向つての憧憬が、その大半を形作つて居るのである。日本人の武士道は、西洋の騎士道の如く婦人を崇拜せぬかはりに、自然の美を愛し、物のあはれを解したのである。

英雄豪傑ばかりではない。日本人ほど國民全體が詩人的なるは、恐らくは世界中にあるまい。歌心は誰にでもある。今日日本で歌を作る人はどの位の數であらう。宮内省の毎年の詠進は何萬といふ數である。歌を作らぬでも俳句を作る。どんな片田舎にも俳句の宗匠は居る。神社奉納の額面は到る處に小詩人の名を列ねて居る。短くて作り易い詩形であ

顯基中納言

るから、上手でこそなければ、何人も作つて、花見遊山の時にも一興とするのである。この花見といひ、雪見といひ、月見といひ、春は花、秋は紅葉、小詩人は誠に忙しいのである。刑場に出づる罪人でも、死に臨んでは一首を口吟むといふ様なのは、恐らくは他國にはない事であらう。我が國民は全國民を擧げて、敘情詩人である、敘景詩人であるといつてもよるしい。

それ故我が國民は隱居すれば盆栽いぢりをする。歌や插花に慰安を求める。昔は罪なくして配處の月を見たいといふ人もあつたが、日本人が世の中を厭ふといへば、風流三昧（カクシ）に日を送る。西洋でいふ厭世は、本當に此の世の中が厭になるのである。自殺するより外に方法が無い。日本人の厭世は、

三三三三三

人事社會がうるさいのである。人事社會から遠ざかつて花鳥風月に近づけば、それで嫌な想念はなくなるのである。西行法師が世を遁れたといつても、一生行脚（ぎやく）して花月を楽しんで居る。鴨長明は頻に世の中をあぢきなく思つたが、方丈（ほうじやう）記の様子で見れば、庵室に入つて自然を楽しんで満足して居る。雙（たふし）が岡の兼好法師は、まだ十分に世の中が厭とも見えぬから問題外である。その他、深草の元政上人でも、近い頃の太田垣蓮月尼でも、世の中に立交るのは厭でも、自然といふ樂地は別にあつたのである。（芳賀矢一―國民性十論）

葛餅歌

一二 草木を愛し自然を喜ぶ下

團團又團團葛餅黑且紫人視猶土塊我覺勝玉子玉子滿掬不
 可啖不及葛餅充飢噉我生何爲不中天降喪饑饉在斯年竈下
 旬日煙火絕往斷葛根山之巔終日所獲不滿擔十指傷損流血
 殷歸來擣治僅數杵咄嗟製餅帶泥土妻拏一喫喜欲狂爭攫不
 肯待頒予只願葛餅堆盆盂豈求玉粒隘甌釜君不見豪富之家
 事奢驕酒海滔滔肉山高鼓腹屢呼吾飽矣豈知菜色滿四郊穀
 粟萬鍾積不散倉中之鼠大如猫(村上佛山)

一三 幻住庵の記

安曇郡石山の奥巖間のうしろに山あり國分山といふそのかみ
 國分寺の名を傳ふるなるべし麓に細き流を渡りて翠微に

唯神也神はの信す
 兩部神を神佛同を信す

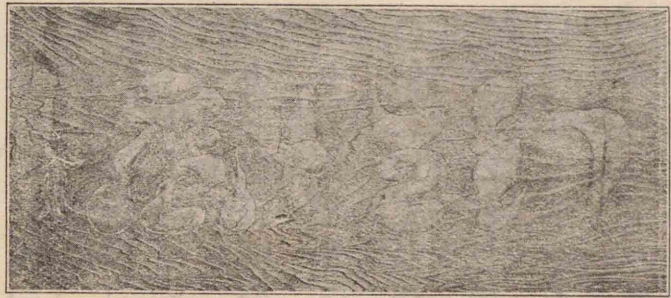
膳所藩士本多八
 左衛門探山居
 士
 芭蕉の門人

四十六歳(元祿
 二年)

登る事三曲二百歩にして八幡宮たたせ給ふ神體は彌陀の
 尊像とかや唯一の家には甚だ忌むなる事を兩部光を和げ
 利益の塵を同じうし給ふも亦たふとし日頃は人の詣でざ
 りければいとど神さび物しづかなる傍に住捨てし草の庵
 あり蓬根笹軒をかこみ屋根洩り壁落ちて狐狸ふしどを得
 たり幻住庵といふあるじの憎何がしは勇士菅沼氏曲翠子
 の伯父になむ侍りしを今は八年ばかり昔になりて正に幻
 住老人の名をのみ残せり予亦市中をさる事十年ばかりに
 して五十年やや近き身は蓑蟲の蓑を失ひ蝸牛の家を離れ
 て奥羽象潟の暑き日に面をこがし高すなごあゆみぐるし
 き北海の荒磯にきびすを破りて今歳湖水の波にただよひ

よし山やがで
出でじと思ふ身
とひ散りなば
とひとつまつら
む。(僧四行)

昔開洞庭水。今水
上岳陽樓。吳楚
東南坼。乾坤日夜
浮。(杜子美) 杜
惠宗烟雨歸雁。
坐我瀟湘洞庭。
欲喚扁舟歸去。
故人道是丹青。
(山谷集)



幻住庵の額

鳩ニホの浮巢の流れとどまるべき、蘆の一本の蔭たのもしく、軒
端ふきあらため、垣根結ひそへなどして、
卯月のはじめ、いとかりそめに入りし山
の、やがて出でじとさへ思ひそみぬ。
さすが春の名残も遠からず、つつじ咲
残り、山藤松にかかつて、時鳥しばしば過
ぐる程、宿かし鳥の便りさへあるを、木つ
つきのつつくとも厭はじなど、そぞろに
興じて、魂は吳楚東南に走り、身は瀟湘洞
庭に立つ。山は未申にそばだち、人家よき
ほどに隔たり、南薰峯よりおろし、北風海を浸して涼し。比叡

田上山麓に猿丸
大夫の墓ありと
無名抄に見ゆ。

徐老海棠集上。
王翁主簿峯庵。
(山谷集)

とくとくと落つ
る岩間の音清
水、汲みほすほ
どもなきすまひ
かな。(西行の歌
なりといふ)

の山比良の高根山より、辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣
垂るる舟あり。笠取笠に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、
螢飛びかふ夕闇の空に、水雞水のたたく音、美景物として足ら
ずといふ事なし。中にも三上山は士峯士の佛に通ひて、武藏野
のふるきすみかも思ひ出でられ、田上山田に古人をかぞふ。な
ほ眺望隈なからむと、後の峯に這上り、松の棚棚つくり、藁の圓
座を敷いて、猿の腰掛と名づく。かの海棠海に巢をいとなみ、主
簿峯に庵を結べる王翁王除除佮佮が徒にはあらず。ただ睡癖山民
となりて、癖癖顔顔に足をなげ出し、空山に虱を捫捫つて坐す。たま
たま心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とくとくとく
の雫を侘びて一爐一の備いとかるし。はた昔住みけむ人のこ

*藤木甲斐守敦直
寛永時代の能書
なり。

とに心高く住みなし侍り
て、たくみおける物ずきも
なし。持佛一閒を隔てて、夜
の物をさむべき處など、い
ささかしつらひたり。さる
を筑紫高良山の僧正は、加
茂の甲斐何がしが子にて、
このたび洛に上り、い
がりけるを、或人して額を
乞ふ。いとやすやすと筆を
染めて、幻住庵の三字を送

とに心高く住みなし侍り
て、たくみおける物ずきも
なし。持佛一閒を隔てて、夜
の物をさむべき處など、い
ささかしつらひたり。さる
を筑紫高良山の僧正は、加
茂の甲斐何がしが子にて、
このたび洛に上り、い
がりけるを、或人して額を
乞ふ。いとやすやすと筆を
染めて、幻住庵の三字を送

動かし、或は宮守の翁里のをのこ共入來りて、おのししの稻
くひあらし、兔の豆畑に通ふなど、我が聞知らぬ農談に、日す
でに山の端にかかれれば、夜座靜かに、月を待ちては影を伴ひ、
燈を取つては、是非をこらす。

かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかく
 さむとにはあらず。やや病身人に倦んで、世を厭ひし人に似
 たり。つらつら年月の移りこし、拙き身の料を思ふに、ある時
 は仕官懸命の地を羨み、一たびは佛籬祖室の扉に入らむと
 せしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、しば
 らく生涯の計とさへなれば、終に無能無才にして、この一筋
 につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老壯は瘦せたり。賢愚
 文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖處ならずやとお
 もひ捨ててふしぬ。

まづ頼む椎の木もあり、夏木立。(松尾芭蕉)

一四 學生の意氣

敬啓、世間一槩に、今の學生を評して墮落せりとか、文
 弱となれりとか申す者有之候へども、小生は之を信ぜ
 ず。昨今試験開際となりて、學窓を離れたる後の身の振
 方に就きて小生に相談に来るもの、皆堅實にして信ず
 べく、多くは雄心落落、海外に運命を賭せむとする者に
 して、中には蒙古に入りて穹廬の中に牛酪を嘗めむと
 する者あり、アルゼンチン・ジャマラの地に封侯を求
 めむとする者あり、北亞米利加に入りて大富豪となら
 むと志す者あり、或は半生をマレー島・ジャヴァ羣島に
 費さむと欲する者あり。中には、身、尙、中學にありて西班

(一) Argentine.
 (二) Guatemala.
 (三) Malay.
 (四) Java.

胸=胃
幕=模
槩=概

牙語を兼修し、南米に新故郷を求めむとする者も有之候。昨今の弊居は丸で少年殖民黨のクラブの様に御座候。知らず、世間學生を罵る者、此等の潮流を知るや否や、小生權力の地に立たず候へば、彼等の爲に助を與ふるの方法に乏しきは、彼等も亦承知の上にて、只助言と奨勵とを得むとして來る者に外ならず候へば、其の志は一層優しく思はれ候。少年無垢の心中より案出するの大望は、殆ど神聖にして、合掌禮拜に價す。小生は彼等と玄關にて別るる毎に、曾中無限の感慨を生じ候。
方今國威四方に光被し、民力蔚然として外に溢れむとし、南蠻西戎の地、皆我が少年の經略に一任するの槩

(-)Cecil Rhodes.
(1853-1900)
(-)Madagascar.
(=)Gallieni.
(1840-)

milkway

*milkway

あり。縉紳先生若しよく此等の殖民黨を助けて其の志を遂げしめなば、此等の中には、英國の爲に一大領土を阿弗利加に建てしセシル・ローヅもあるべく、佛國の爲にマダガスカルを取りしがリアニも可有之候。
帝國主義は近來の流行語に候へども、方今に於ては、帝國主義とは殖民政策に外ならず。而して殖民政策も詮じ來れば、挺身蠻烟瘴雨の中に突入する青年殖民家をして、其の志を遂げしむるの機會を作りやるに外ならず候。此の志を遂げしむるの途をも開かず、口舌の上にて帝國主義などと唱へ候處が、空言寸益も無之候。或は是等少年の大望を以て河漢の望なりとする者なき

一四 學生の意氣

九五

にあらざるべしと雖も、希望ある所方法あり、大事が夢の如くに成るは方今天下の大勢に候へば、世間學生を罵る人人が、彼等の爲に新運命を開拓するの道を講じやらむ事を切望致候。(竹越三又一三又文存)

一五 自然に接せよ

樂しき哉、夏季の學生や、學期方に終を告げ、三旬の休課一物の身邊を累はすなし。身は浮鷗の如く、心は行雲の如く、西に、東に、舟に、車に、將に江湖の風月に走らむとす。

それ天地は大人物なり。山水語らず、日月言はずと雖も、かの能く自然を觀る者には、其の高測るべからず、其の深窺ふ

べからず。漠然限なきが如くなれども、しかも渾然として全く、茫茫意無きが如くなれども、しかも鑿鑿として味あり。星辰の大、毫絲の微、布置則あり、運行度あり。雷霆時に怒れども地動かず、風雲時に號べども天常に澄む。悠然として彼の蒼を仰げば、虚しきが如く、満てるが如く、情時に佛鬱意時に蕩逸、或は怡憺虚無なるが如く、或は縱横卓犖なるが如く、氣象萬千、意料究り無し。顧みて人間を眺むれば、拘拘切切、濁氣途に薰蒸す。眞に慚死すべきなり。是を以て大人は常に自然を師とす。

自然を師とする者は、自然を解する法を知らざるべからず。自然を解する法、唯己を虚しうするにあるのみ。山嶽の瑰

煙火の境り係り外

琦、河海の浩茫、風雲、雷霆の奇觀、心を虚しうして是に對する
有るが 事久しければ、一氣自ら恍惚として直に造化の樞機に參し、
天地の氣を 身世共に遺れ去りて、天地我と一體たり。忽然として、煙火の
 境に歸りても、尙氣味遼遠、雄心腹に滿つ。此の閒一物の微香
混同 として語るべからざるものあり。かの磅礴、渾茫、直に天より
ふりやちり 下り、父師に依りて立たざるもの、神聖、雄奇の極に參して、反
偉大なる つて正堂堂に歸す。達人の事業亦是の如きのみ。人は法を
 造り、而して法に苦しめらる。大人物は常に人法を以て天則
 を遺れず。顧みて彼の自然に學ぶ。是を規し、是を矩し、朝に一
墨木 頭を描き、夕に一角を畫するもの、竟に墨士、粟人の伎倆のみ。
墨木 能く自然を解する者は、常に能く自然を大觀す。幽谿、小壑

山は其の高きを欲し、水は其の廣きを欲す。千峯趨り、萬巒

の奇を喜ぶもの、未だ與に天地の大文章を語るに足らざる
山は其の高きを欲し、水は其の廣きを欲す。 なり。所謂泰山、華嶽、直に天と接する底の壯觀は、斷橋、落湖の
 景に見るべからざるなり。
山は其の高きを欲し、水は其の廣きを欲す。 山は其の高きを欲し、水は其の廣きを欲す。千峯趨り、萬巒
 走り、環繞、周匝、拜するが如く、揖するが如く、疆立、萬丈、四海を
瞰視して 瞰視して是に臨む、眞に天地の雄物に非ずや。煙波浩蕩、千里
 一碧、一旦空回り、雲昏く、海水、天風、渙として相遭ふや。瀆、礮、吹
邊渺として 邊渺として津涯なき、眞に天地の偉觀に非ずや。大人物の規
度多く 度多く茲に出づ。顧みて人生名利の巷を望まば、誰か其の子
子焉 子焉たるに驚かざらむや。
 書は能く人を教へ、自然は能く人を造る。社會は能く人を

制裁し、自然は能く人を解放す。人をして能く其の本に歸らしむるものは自然なり。社會も亦時に自然に歸るを要する事あり。自然は何れの時代に於ても、進歩の標準なればなり。夏季の學生は自然の友たらざるべからず。實際の人生に入るに先だち、出來得るだけ自然の啓沃に接せざるべからず。是、未來に於て青年の純潔と大望と理想とを活現する所以なり。(高山樗牛)

偉人能發山水之美

昔人稱山水秀麗之氣能生偉人。余及讀賴山陽之文、大知其不然也。山陽安藝人、而安藝固多佳山水。然先是未聞有人能發揮

其秀麗者。及山陽氏出、以雄偉奔放之文、與鏗爽高逸之詩、發而形之。其聳拔嵯牙、滔汨洋洪之勢、莫不奔騰於筆下焉。於是安藝山水秀麗之氣、濯濯灑灑、入眉目、觀者駭愕、從而託之曰、山水之秀氣、果生若人矣。殊不知藉偉人之筆、以發山水之秀也。且夫山陽好遊、單身走千里。其所經歷、山川觸於目、而動於心者、必發之詩文。巖壑爲之生彩、濤瀾爲之增色。豈獨安藝一州而已哉。否則天下山川之美、何限。而求卓犖奇偉、如山陽其人者、寥乎無聞焉。然則非山川之秀能生偉人、而偉人能發山川之美耳。(長野豊山)

一六 近世の和歌

徳川文化の時代
下河邊長流

(三三〇—三三二)

下野や那須野に去げる篠をとりて、
あづまをのこは矢にぞはぐなる。
あづまは下野也

憎契沖

(三三六—三三九)

はつ瀬のや里のうなめに宿とへば、
霞めるうめのたち枝をぞさす。
うなめは女の子也

荷田春満

(三四七—三四九)

ますらをや折にふれてはたけり猪の、
たけきころのなどなかるらむ。
たけきは猪也

賀茂眞淵

常陸國眞壁郡葦穂山、今、足尾山といふ。

小筑波も遠つあしほも霞むなり、
ねこし山こしはるや立つらむ。
ねこし山は筑波にあり

信濃なる菅の荒野をとぶ鷺の

つばさもたわに吹くあらしかな。

荷田蒼生子

春満の女。(三六一—三六三)

穂浪よる秋の田のもにかりほして、

かぜのすがたは見るべかりけり。

本居宣長

(三六三—三六六)

思ほさぬ隠岐のいでまし聞くときは、

しづの男われもかみさかだつを。

小澤蘆庵

(三六三—三六六)

いくそたびかき濁しても澄みかへる、

水や皇國のすがたなるらむ。

(三三六—三四六)

すみだ川蓑著てくだす筏士に、

加藤千蔭

かすむあしたの雨をこそしれ。

村田春海

こころあてに見し白雲は麓にて、

海行を水漬く底の行舟をもちて大なる

加藤美樹

もののふの草むす屍年ふりて、

あきかぜさむし、桔梗がはら。

清水濱臣

窗の桐、かきねのやなぎ、ひと葉ちり、

ふた葉みだれて秋かぜぞふく。

香川景樹

いたづらに思ひしみねのひとつ松、

こよひ月こそすみのほりけれ。

おりたちて昨日か摘みし芹川の

たけ田のはらに秋風ぞふく。

千種有功

釣たれてかへらむとすれば、加茂川の

やなぎの木の間月のすずしき。

加納諸平

雲かかるわたのみなかに、あら潮を

(三三六—三四六)

(四) 信濃東筑摩郡の古戰場。

(三) 黒淵門人。(三三六—三四七)

(三三六—三四六)

(三三六—三四六)

(七) 堂上家。(三四七—三四八)

(八) 宣長孫弟。(三四六—三四七)

景樹門人。(四四三)
一五三〇

熊谷直好

うちしきる麓の里の雞がねに

あけこそ渡れみねのまつ原。

宣長孫弟。(四四二)
一五二四

中島廣足

さえざえし嵐は雪になりにけり、

松の葉しろき夕ぐれのやま。

宣長孫弟。(四四五)
一五二七

足代弘訓

雨そそぐ森のともし火ともすれば

みえかくれして狐なくなり。

(四)
(四七二一五二八)

橘曙覽

たてがみをとらへ、またがり、裸馬を

あづまをのこはあらなつけする。

景樹門人。(四四九)
一五三三

八田知紀

網引する舟の夜寒を身にしめて、

ねられぬ妻やころもうつらむ。

春海孫弟。(四三〇)
一五二二

井上文雄

よひよひの卯の花月夜、ほととぎす、

田舎ははやく夏めきにけり。

(七)
(四三三一二五三三)

太田垣蓮月

野に山にうかれうかれて歸るさを

ねやまでおくるあきの夜の月。

(一) Socrates.
(B.C.469—399)

(二) Athene.

一七 ソクラテース最後の教訓上

大聖^(一)ソクラテースの與へた最後の教訓は、實に國法の威嚴に關するものであつた。

今を去ること凡そ二千三百有餘年の昔、彼が單衣跣足の姿で、當時世界の文化の中心と稱せられて居つたギリシアの^(二)アテネの市中、羣衆雜鬧の各處に現れて、其の獨特の會話法に依つて、自負心の強い市民を指導・教訓し、就中好く青年輩の指導・教訓に力を致したことは、甚だ顯著なる事實である。もとよりソクラテース自らは、敢て一世の指導者を以て任じて居た譯ではない。唯人人と共に眞善の何ものなるかを討求しようとして欲したのであつた。併しながら彼の眞意を了解しない大多數の俗衆は、卻てソクラテースの爲に、各自の自負心を傷けられたものと考へ、彼に對して怨を抱くこととなつた。終に或機會を以て、彼は新宗教を輸入・唱導して國教を顛覆し、且つ詭辯を弄して青年の思想を惑亂する者である、と云ふ事を訴へるに至つた。かくて種々の裁判の末に、我が大聖は遂に死刑を宣告せられたのである。

さて愈、死刑が執行されるといふ日の前日になつて、ソクラテースの門弟の一人なるクリト^(三)トンは、脱獄を勧めようと思つて、早朝、其の獄舎に訪ねて來た。所がソクラテースは、さも心地好ささうに安眠して居つたのである。クリト^(三)トンは

(三) Criton.

は師が其の死期の刻刻に近づきつつある際に、斯く平然自若たるを見て、如何にも感歎の情を禁めることが出来なかつたが、やがてソクラテースの目覺めるのを俟つて、脱獄を勧めた。

クリトーンは、裁判の不正なること、刑罰の不當なることを説いて、

「師が斯く生命を保ち得べき際に、自ら好んで身を死地に投じて、生命を抛棄せられるのは、寧ろ悪事を敢行するものであつて、今、甘んじて刑に就くのは、是即ち敵人の奸計に黨するものであると謂はねばならぬ。又此の際、妻や子供等を見捨てるのは、師が平素から、子供を教養すること

の出来ない者は子を設けてはならぬ」と云はれた垂訓にも悖るものである。此の容易にして且つ危険のない脱獄を試みないのは、畢竟、善にして勇なる所業を爲さないものである。これ師が平生の主張に對しては甚だ不似合なことで、自分は、師の爲にも、はた又其の友たるクリトーン自身の爲にも、慚愧の念に堪へざる次第である。

と切に勧告した。情には脆く、激し易いクリトーンは熱誠を籠めて、其の恩師を動かさうとしたのであつた。ソクラテースは、其の間、心靜かに、熱心なる言葉に耳を傾けて居つたが、やがて徐に口を開いて、

「親愛なるクリトーンよ、汝の熱心は、若しそれが正しいも

のならば、其の價值、實に量る可からざるものである。併しそれが若し不正なものであるならば、熱心の度の大いなるに随つて、其の危険も亦甚だ大いなるものではあるまいか。それ故に、余は先づ、脱獄といふ事が、果して正しい事であるか、或は又、不正の事であるかを考へる必要がある。余はこれ迄、何時も熟考の上に、自分でこれこそ最善だと思つた道理以外のものには、何物にも従はなかつた。かかる運命が俄かに我が身に降りかかつて來たからと言つて、自分のこれ迄主張して來た道理を、今更投棄してしまふことは決して出來るものではない。否、余に取つては、道理は恆に同一不易のものであるから、余の従前自ら主張

し、尊重して居つたことは、今も尙、余の同じく主張し尊重するものである。

唯生活するのみが貴いのではない、善良なる生活を營むのが貴いのである。他人が己に危害を加へたからとて、我も亦他人に危害を加へるならば、それは惡を以て惡に報いるもので、決して正義とは云へない。して見れば、假令アテネの市民等が、余を不當に罰しようとも、我は決して之に報いるに害惡を以てすることは出來ないのである。と説いた。

一八 ソクラテース最後の教訓下

ソクラテースは更に語をついで言つた。

「若し余が此の牢屋を脱走せむとする際、法律及び國家が來つて、ソクラテースよ、汝は今何を爲さむとして居るか。汝が脱獄を試みようとするのは、即ち汝が其の力の及ぶ限、法律及び國家を破壊しようとするものではないか。凡そ其の國家の法律の裁判に何等の威力もなく、一私人が是を侮蔑し蹂躪するやうな國家が、尙能く國家として存立し、滅亡を免れることが出来るものであると汝は考へるか。」と問うたならば、クリトーンよ、我等は之に對して何と答ふ可きであるか。」

かくて、靜かに國法の重んずべき所以、及び一私人の判斷を

以て之に違背するは、即ち國家の基礎を覆さむとするものである所以を論じ、而して更に、

「我等は之に答へて、然れども國家は已に不正なる裁判を爲して余を害したり。」と答ふべきか。

とクリトーンに問うた。クリトーンが「勿論」と答へるを待つて、

「然らば、若し法律が、ソクラテースよ、これ果して我等と汝と契約した所のものであるか。汝との契約は、如何なる裁判と雖も、國家が一度之を宣告した以上は必ず之に服従すべし、といふのではなかつたか。」と尋ねたならば如何に。凡そアテネの法律は、苟もアテネ人にしてこれに對して

不滿を抱く者あらば、其の妻子眷族を伴うて、何處へなりとも、その意に任せて立去ることを許して居るではないか。今、汝はアテネ市の政治・法律を熟知しながら、尙此の地に留まつて居るのは、即ち國法に服従する事を約したものではないか。かかる默契を爲しながら、一たび其の國法の適用が、自己の不利益となつたからと云つて、直に之を破らうとするのは、抑、不正の企ではあるまいか。且つ又此の默契たるや、決して他より壓制せられたり、欺かれたり、又は急遽の間に結んだものではないのであつて、若し汝がこの國法を嫌ひ、或はこの契約を不正と思つたならば、このアテネ市を去る爲には、既に數十年の長年月があつ

たではないか。それにも拘らず、今更國法を破らうとするのは、是即ち當初の默契に背戾するものである。」と縷々自己の所信を述べた上で、

「斯かる契約を無視すれば、正義を如何にせむ、天下後世の識者の嗤笑を如何にせむ。若し汝の勸告に従つて脱獄するやうなことあらば、是即ち悪例を後進者に遺すもので、卻て、彼は青年の思想を惑亂する者である、といふ誹毀者等の偽訴を眞實ならしむるものである。」

と説破した。而して、

「正義を忘れて子を思ふこと勿れ。正義を後にして生命を先にすること勿れ。正義を輕んじて何事をも重んずるこ

と勿れ。」

これがその結論であつた。かく滔々數千言を費して、丁寧深切に脱獄の非を教へ諭したので、流石のクリトーンも終に辭なくして、この大聖の清説に服したのであつた。

(穂積陳重「法窗夜話」に據る)

一九 憲法

憲法は國家統治の大法にして、國權の本體と行用との大綱を規定す。その形式は成文の法典たると、法令及び慣例を綜合してその法理を成すとを問はず、國家あれば必ず國權の體用を規定するの法あるものなり。

大日本帝國憲法は天皇これを制定す。我が憲法は統治者の命ずる所にして、君民相互の間に成れる規約に非ず。この本末の大義は、更に辯ずるを待たずして明白なり。蓋し憲法は統治主權の行用をして一定の軌轍に由らしめ、臣民の權利及び財産の安全を保護するの大典たり。國民はこれを敬重して遵奉すべく、これを干犯し、紛更を試みることを得ず。大憲の犯すべからざるは、神聖にして侵すべからざる天皇の詔命なればなり。

憲法は國權の本源に非ず。又君主の統治主權を制限するの權力に非ず。君主と國憲とを相對峙する權力となし、これを以てかれを制限するものとなすは、純正なる君主國體に

戻り、又我が立憲の事實と名分とに反する謬見たり。我が大憲は君主の命ずる所にして、君主の意に反してこれを變更することを得ず。君主はこれによりて統治權を行へども、憲法は臣民が君權を制限する權力にあらざるなり。憲法の規定する所は、統治の大綱に止まる。而して時機に臨み、便宜を追うて、施政の準則を立つるは法律命令による。治國の大綱はこれを憲法に掲ぐるものは、法令を以てこれを變更することを要せざればなり。但し憲法たり、法令たるを問はず、國權の作用及び臣民の權利義務の準則たる者は、共に國法を構成するものにして、均しく循由の效力あることを忘るべからず。

憲法は立法・施政の上に最高の準則を表示す。法律命令を以てこれを變更することを得ざるなり。統治機關は臣民と共に憲法に違ふことを得ざるは明白なり。然れども臣民は私に憲法を解釋し、法令を違憲なりと審判し、これに服従することを得ず。憲法を解釋するの權は獨り大權に存す。何人も、君主の命ずる法令を違憲なりと思惟するを口實として、國權に對して反抗を試みることを得ざるなり。憲法の制定・改定は天皇の大權に屬す。憲法は法律に非ず。立法の手續を以てこれを變更する事を許さず。通常の立法の原則はこれを通用することを得ざるなり。又これを立法の變則と云ふも不可なり。憲法改正は立法に非ざればなり。

將來若し憲法を改正する必要あるときは、敕命を以て議案を帝國議會の議に付せらるべし。この場合に於て、兩議院は各、その總員三分の二以上出席し、出席議員三分の二以上の多數を得るに非ざれば、改正の議決を爲すことを得ず。議會は天皇の諮詢に應へ、その議を奉るの外、自ら進みて發議の權を執ることを得ず。又その議定する所を採納すると否とは固より大權に屬す。憲法の改定はこれを裁可するの權の外、なほ明かに發議の權を大權に存留す。かの立法の、發議の權を議會と分つものと混同し、比類して、これを論斷すること勿れ。(穗積八束「憲法大意」に據る)

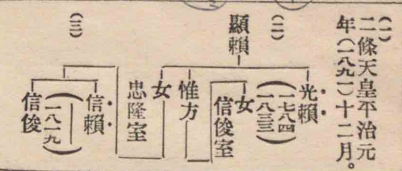
英雄罵大碩儒

高山正之、嘗至一士人家、見案上駿臺雜話、披而讀之。至并論楠公與諸葛亮、謂孔明待三顧而出、其進重、故受任專。楠公則不然、所以委任不重、而自速戰死也。怒髮逆衝、直擲書於前庭。主人驚問、故正之曰、腐儒不解事矣。亮之於劉備、素非有君臣之分也。則其重也宜。我延元帝、則萬代一統之主。不幸有出狩之變。此天下之人、苟食斯土者、將疾走勤王之不暇。況楠氏邑、在封畿之內。其待王命而出、吾尙以爲晚。若之何、其與亮同出處哉。聞者服其至論。(鹽谷岩陰)

二〇 光賴卿の參内

公卿(三位以上)
御前(大臣)

上(三位以上)
教(五位以上)
下(六位以上)
地下(六位以上)



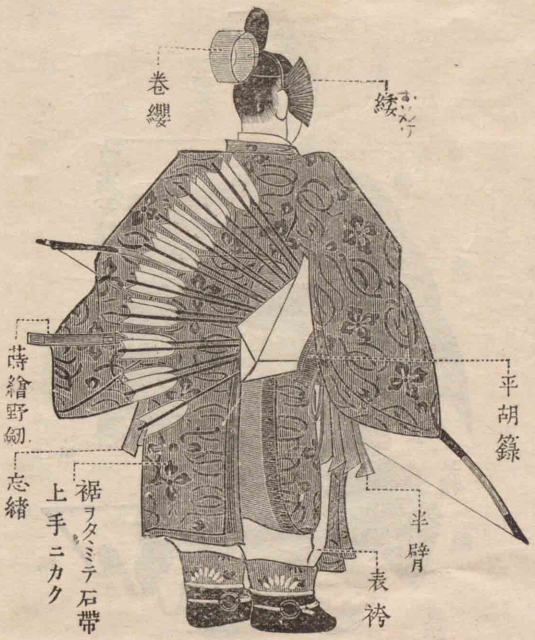
二條天皇平治元年(一一九二)十二月
 光頼(一七四)
 信俊室(一八三)
 惟方(一八三)
 忠隆室(一八三)
 信賴(一八三)
 信俊(一八三)
 信後(一八三)

さる程に、内裏には同じき十九日公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿、この程は信頼卿の振舞過分なりとて、不參にておはしましけるが、參内して承らむとて、殊に鮮かに束帶引繕ひ、蒔繪の細太刀おとなしやかに佩き給ひ、めものどこの桂右馬允範能に、膚に腹巻著せ、雑色の装束に出立たせ、自然の事もあらば人手にかくな、汝が手にかけて光頼が首をば急ぎ取れ。とて御身近く置き、その外清げなる雑色四五人召具して、大軍陣を張りて處處門門を堅く守護しけるを事ともせず、さき高らかに追はせて入りたまへば、兵どもも大いに恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて通し奉る。紫宸殿の後を経て殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その座の上臈たち皆下にぞ著かれける。光頼卿、こは不思議のことかな。人はいかに振舞ふとも、かれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には著くまじきものをと思はれければ、左大辨宰相長方卿末座の宰相にはおはしましけるに、今日の御座席こそよにしどけなう見え候へ。と色代して、しづしづと歩み、信頼卿の上にもつと著きたまふ。

て、その座の上臈たち皆下にぞ著かれける。光頼卿、こは不思議のことかな。人はいかに振舞ふとも、かれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には著くまじきものをと思はれければ、左大辨宰相長方卿末座の宰相にはおはしましけるに、今日の御座席こそよにしどけなう見え候へ。と色代して、しづしづと歩み、信頼卿の上にもつと著きたまふ。



光頼卿は信頼卿のためには母方の叔父なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられたり。右の袖の上に居懸け

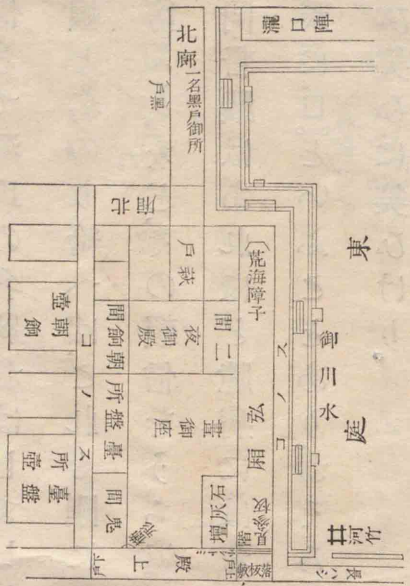


武官束帶

られて、ふし目になりて色を失はれければ、著座の公卿あなあさましと見給ふに、光頼卿下襲の尻引直し、衣紋繕ひ、笏取直し、氣色して、

「今日衛府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらむ者をば死罪に行はるべしとやらむ承りて參内するところなり。抑、

何事の御説ぞ。」と問ひけれども、信頼卿物も宣はず、著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て光頼卿つい立ちて、悪しう參つて候ひけり。とて、しづし



内裏涼殿の圖

づと歩み出でられけり。庭上に充ちたる兵どもこれを見奉りて、あはれ、この殿は大剛の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕し給ひつれど

も、右衛門督殿の座上に著く人一人もおはしまさざりつるに、しいだしたることよ。門を入りたまふより、聊かも臆した

源満仲の子。(一)
二六二
頼光の弟。(二)
七一七〇

る體も見えたまはず。あはれ、この人を大将として合戦せば、いかばかりか頼もしからむと申せば、傍なる者の、昔、頼光、頼信とて源氏の名將おはしましき。その頼光をうち返して光頼と名のり給へば、これも剛にましますぞかし。といへば、又傍より、など、その頼信をうち返して信頼と附きたまふ右衛門督殿はあれほど臆病にはおはしますぞ。といへば、壁に耳、天に口。といふことあり。おそろし、聞かじ。といひながら、皆忍び笑ひに笑ひけり。

左兵衛督檢非違使別當藤原惟方。

光頼卿かやうに振舞ひたまへども、急ぎても出でられず、殿上の小部こぶの前、見參の板高らかに蹈鳴して立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩戸の邊に、弟の別當わか惟方のおはしける

少納言藤原通憲入道信西。(一)六

るを招き寄せて宣ひけるは、公卿僉議とて催されつる間、參じたれども、承り定めたることもなし。誠まことやらむ、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳あやうへ承るごときは、その人皆當時の有識そと、然るべき人どもなり。その内に入らむこと甚だ面目おもてなるべし。さても先日、右衛門督が車の尻に乗つて、少納言入道が首實檢のために神樂岡へ向はれけることはいかに。以ての外、然るべからざる振舞かな。近衛大将檢非違使別當は他に異なる重職なり。その職に居ながら、人の車の尻に乗りたまふこと、先蹤せんそうもいまだ聞及ばず。當時も大いに恥辱なり。就中、首實檢は甚だ穩便ならず。と宣へば、別當、それは天あま氣かにて候ひしかば。とて赤面せられたり。光頼卿重ねて、こは

藤原高藤
高藤の子定方。

平清盛、當時大
宰大貳たりき。
紀伊國日高郡切
目王子神社の所
在地。

いかに。敕諭なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべ
き。我等が曩祖勸修寺内大臣三條右大臣延喜の聖代に仕へ
てより以來、君已に十九代、臣又十一代、承り行ふことは皆こ
れ徳政なり。一度も悪事に従はず。當家はさせる英雄にはあ
らざれども、偏に有道の臣に伴つて、讒佞の輩に與せざりし
故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかる程の事はな
かりしに、御邊始めて暴悪の臣に語らはれて、累家の佳名を
失はむこと口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げず
して、切目の宿より馳上るなるが、和泉紀伊伊賀伊勢の家人
等待受けて大勢にてあなる。信賴卿が語らふところの兵そ
こばくならじ。平家の大勢押寄せて攻めむには、時刻をやめ

ぐらすべき。もし又火などをかけなば、君もいかでか安穩に
わたらせたまふべき。灰燼の地となりたらむだにも朝家の
御歎なるべし。いかにいはむや、君臣ともに自然の事もあら
ば、天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべし。右衛門督は御
邊に大小事を申しあはすとこそきこゆれ。相構へて相構へ
て、隙をうかがひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらる
べし。さて主上はいづこにおはしますぞ。黒戸御所に。上皇は。
「一本御書所に。内侍所は。温明殿に。劔璽は何處に。夜の大殿に。
と、左衛門督次第に尋ねたまひければ、別當かくぞ答へられ
ける。

餉
餉
餉

又朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者

ぞ。と宣へば、それには右衛門督住み候へば、その方様の女房
 などぞかつらつげろひ候らむ。と申されければ、光頼卿聞きもあへ
 ず、世の中は今はかくござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝
 餉けんには信頼住み、君をば黒戸御所に遷し參らせたり。末代な
 れども、さすがに日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大
 神・正八幡宮は王法座下をいかが守りたまひぬるぞ。異國にはか
 やうの例ありと雖も、我が朝にて未だかくの如き先蹤前例を聞
 かず。前代未聞の不思議かな。とて、のろまのろしげに憚る所な
 くくどきたまへば、惟方これは、人もや聞くらむ。と、よわざにすさまじ
 げにて立たれたれども、かつは悲しくて、われいかなる宿業前世
 によつてかかる世に生れ合ひ、憂き事をのみ見聞くらむ。昔

の許由きよゆにあらねども、今の内裏の有様を聞かむ輩は耳をも
 口をも洗ひぬべくこそ侍れ。とて上うへの衣えの袖絞るばかり泣
 かれけり。信頼卿の座上に著かせられし時はさしもゆゆし
 く見え給ひしが、君の御事を悲しみて、うち萎れてぞ出で給
 ひける。(平治物語)

改訂新撰實業讀本卷七終



大正六年一月十三日印刷

大正六年一月十七日發行

改訂新撰實業讀本(全八册)

定價各金參拾壹錢

大正十一年度臨時定價各金五拾九錢

著者 佐々政一

東京市小石川區大塚窪町八番地

發行者 株式會社明治書院

取締役社長 三樹一平

東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者 島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所 三秀舍



發行所

東京市神田區錦町一丁目十番地
振替貯金口座東京四九九一番

株式會社

明治書院
電話神田二三九八番



杭杭科
陳

広島大学図書

2000081510



H. Kobayashi